
生きてはいた。

田中 遼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生きてはいた。

【Nコード】

N3186M

【作者名】

田中 遼

【あらすじ】

いつも、生きてはいた。しかし、それだけだった。斎藤 武は、親に人生の舵を奪われてしまった中学生。疲れ果てた、悲しい表情で今日も電車に揺られている。昨日までもずっとそうしてきた。明日からも同じ毎日が続いていくのだ。どこにも救いが見出せない彼は、ある日、不思議な「夢」を見た……。

どこで道を間違ったのだろう。

奴隷船さながらの鋼鉄の箱の中で、暗い表情の人々が一緒に揺られている。

いろいろな場所で皮肉られている「ラッシュアワー」。

いつまでたっても改善される気配はない。むしろ段々とひどくなっているようだ。

目まいのするほどの人、人、人。

地下鉄の暗い窓に映っている中学生は、信じられないほど辛そうな顔をしている。

僕は彼と窓越しに目が合ってしまった、慌てて顔を背けた。

視界の隅で、彼も同じ動きをした。

そこで「まさか」と思って、彼の顔を確認する。

いつもの通り、悪い予感だけは的中する。

あそこに映っているのは、僕自身。

辛そう顔は、自分の顔だった。

「まさか」とは言ったが、心当たりが全くない訳ではない。

一つ。この人ごみだ。これは僕だけではない。

満員電車に乗り込む人は、皆陰鬱な気持ちで乗り込む。

そして、その感染力といたら、天然痘もびっくりだ。

車内中に、その空気が満ちているのだ。

一時間も乗っていたら、気分も悪くなる。

二つ目の理由はそこに関係がある。

家を出てから一時間半、ずっと立ちっぱなしだ。

いささか慣れてきたが、疲れることに変わらない。

三つ目は、最後にして最大の「心当たり」。

今向かっている学校だ。

小学校まで近くの公立に通っていたのに、親に無理矢理有名（無実）私立中学校の入試を受けさせられ、非常に運の悪いことに、たまたま受かってしまった。

僕の平和な日々そこで終わった。

01 (後書き)

「Season」と同じく、またしても賞に落ちた作品の公開です。
笑

何か小説を公開したかったのですが、「楽譜のない歌たち」は詩だし、「時は戦国」や「In Articulo Mortis」は書くのに相当なエネルギーを要するので、手軽に更新できる「完結済みの小説」の手持ちを見て、この作品を選びました。

「賞に落ちた」と書きましたが、落ちた時に「え!？」と驚いてしまったほどの自信作です。笑

まあ結局ダメだったわけで、その程度の作品なのですが、楽しんでいってください。

評価・感想、お待ちしています！

田中 遼

僕はようやく電車から解放され、駅から学校までの10分程度をのろのろ歩いていた。

幾人もが僕を追い抜いていく。

何人かが僕にあざけりの視線を送ってきたのは、多分、気のせいではない。

校門の前で立ち止まってしまった。

建て替えたばかりでまだ汚れていない白い校舎が僕を見下ろしていた。

なんで僕はこんなところに入ってしまったのだろう。

「おい、そろそろHRが始まる。早くしなさい！」

僕の記憶違いでなければ、彼はここの学校長だ。

この偉そうな態度や言葉遣いが、生徒の反感を買っていた。

僕は歯向かわず、黙ったまま校舎に入った。

教室の中は、いつものようにざわついていた。

一際大きな笑い声が起こった、その輪の中心にいるのは、時田 健。スポーツ万能、頭脳明晰。その上顔もハンサムという、少女マンガの主人公のような超人だ。

欠点は、その性格。

僕は教室を横切り、自分の席へ向かった。

そして机にかばんを置いた瞬間、後ろから突き飛ばされた。

「うわー!!」ドガア!

体が机と一緒に倒れた。

どこかにぶつけたのか、倒れた時の音によるのか分からないが、耳がじんじんする。

が、それでも、周りの連中の笑い声は消せはしなかった。

時田が言う。

「立てよ、武」

僕はぶつけた腕をさすりながら立ち上がった。

武というのは僕の名前だ。フルネームは斎藤 武。中学二年生だ。

倒れた机を戻そうとすると、時田が足でそれを踏みつけた。

「……やめろよ」

「まあ、そうあせんなんて」

時田はニヤニヤ笑い、倒れた机の上にどかりと腰を下ろした。

「……」

時田の足が、床に転がっている僕のバックを踏みつけた。

バキバキと物が壊れる音がしても、時田はニヤついているだけだっ

た。

「……やめろって」

「金を返すならやめてやるよ」

「……金……？」

時田がニヤついたまま突然立ち上がり、近づいてきたと思った瞬間、僕は床に倒されていた。

こぶしを受けた左頬と、倒れたときに打った後頭部、床にすれた背中、じわじわと痛みが広がっていく。

声を出すことも出来ない。

「忘れたのか？五千円も貸したんだがな」

「五万円も取ったの間違いだろ」

立ち上がりながら呟いたこの独り言は、しっかりと聞かれました。

「あゝ???よく聞こえねえ……」「ドカツ!」「な!!!」

みぞおちに彼のこぶしがめり込んだ。あまりの見事さに、呼吸も出
来ない。

床にうずくまった僕のポケットから、財布が抜かれるのを感じた。

「少ねえな!千円つきゃ入ってねえぞ!?!」

歯を食いしばって見上げると、彼は僕の財布から最後の一枚を取り
出し、皆に見せていた。

時田は僕を見下ろしてニヤリと笑った。

「……でもどうやら、小銭は多いぞ?」

時田は僕の財布を振って見せた。

カチャカチャと軽い音が鳴った。

未だに痛みが麻痺している。

殴られた辺りに痛みらしいものがあつたが、感じる事が出来ず、
形のつかめない苦しみが残っていた。

何とか立ち上がって見たものの、吐き気と目まいでしっかり立つことができずそのままならなかった。

「…………返せよ」

二ヤつきながら、財布を上に向けては捕るを繰り返していた時田が、いきなりそれを投げつけてきた。

財布は捕ろうとして広げた僕の左手をはじき、地面に落ちた。

それを拾うときに起きた笑い声のせいで、耳が熱くなった。

時田が頭を振りながら近づいてきた。

「鈍いなあ…………鍛えてやるっか？」

「やめ…………」

僕は彼の手には注意を向けていた。

二度も殴られているのだから、当然だろう。

だがしかし、薄ら笑いを浮かべた時田は、眉一つ動かさず、僕の急所を蹴り上げた。

僕がうずくまっっているちょうどそこに担任が入ってきた。

と言っても、救いにはならない。

二十代後半の彼は既に、理想を追うことより、賢く世を渡ることに目覚めていた。

彼は言った。

「斎藤……そんなところで寝るな！」

彼はこの状況が分析出来ない程愚かではない。

只、賢く生きる上で、こうした「ちょっとした」問題には目をつぶった方が良く、というだけのことだ。

時田は僕を引っ張って立たせ、倒れた机のあるところに突き飛ばした。

また、クラスのほとんどが笑った。

担任は「危ないから気をつけろ」というようなことをぼそぼそ呟い

た後、何事もなかったかのようにHRを始める。

僕は歯を食いしばり、なるべく音を立てないように机を戻そうとした。

が、同時にかばんを拾おうとしたのが間違이었다。

最後の最後で手が滑り、机が再び倒れて大きな音を立てる。

「静かにしろよ、このカス！」

顔が赤くなるのを感じた。

それを隠そうして再び机に手をかけると、今度は隣の女子が手伝ってくれた。

「草薙……」

「草薙さん！そんな能無し、手伝うことねえぞ！」

時田のせりふで皆が笑ったが、草薙は無表情だった。

彼女の協力で戻せた机の上に、ポケットティッシュが置いてあった。

不思議に思って窺うと、彼女はこっちを見ないまま唇をつついた。

(え?)

反射的に自分の唇をぬぐうと、血がついていた。

それで、もらったティッシュをありがたく使い、切れた唇を拭いた。

こんな日々が続いている。

疲れていた。

それ以外にじっくり来る言葉はない。

とても疲れていたのだ。

僕には、人が明日を待つ気持ちが理解できなかった。

明日にも同じ苦しみが続いていくことははっきりしているのだ。

僕に死ぬ勇気があれば、きっとそうしていただろう。

ただ僕には、それすらなかった。

流されるままだったのだ。

小さい頃、自分の道を歩いていた頃、そのときの気持ちは忘れてしまった。

殴られ、蹴られ、投げられた後、ようやく学校から解放された。

僕は誰よりも早く教室を後にした。

逃げる「ように」「というのは間違いだ。

僕は教室から「逃げ出した」のだから。

駅のホームで電車を待っていると、すぐ隣に制服を着た娘が並んだ。横目で見ただけでははっきりとは分らないが、どうやら同じ学校の生徒らしい。

電車が来た。

端の席に座ると、さっきの娘がすぐ隣に腰掛けた。

驚いて顔を窺うと、草薙だった。

「草薙!？」

「何だ、気付いてなかったの？」

草薙はにこりと笑ったが、直後にうつむいてしまった。

彼女こそ唯一の救いだ。

草薙 優は小学校からのクラスメイトで、恐らく一番仲の良かった女の子だ。

中学に入ってから 僕が時田に殴られるようになったから
は、少し距離があったが、間接的に助けてくれていた。

「タケ……ごめんね」

「へ？」

目をそらされてしまった。

沈黙の中、電車の規則的な揺れと音が、いつまでも続いていた。

結局、いつの間にか彼女とはぐれ、一人の時間のほうが多かった。

地下鉄に乗り換えた後、僕はずっとうつむいていた。

窓を視界に入れないために。

朝より疲れた顔があるのは、分かりきっているのだ。

それをまともに見据える勇氣は、僕にはなかった。

家にたどり着き、二階の自分の部屋で椅子に沈み込む。

溜息をつくたびに我に返らされた。

と、急に扉が開き、母が顔を出した。

「武！？塾に行く時間でしょ！？」

僕は目を押さえたが、すぐにふらふらと立ち上がった。

「……………分かってるよ……………」

「まだ着替えてないの？」

「……………このまま行く……………」

母は不満がありそうだったが、さっといなくなった。

僕はのろのろと荷物をまとめ、階段を下りた。

玄関で母が腕組をして僕を睨んでいた。

「……本当は言いたくないんだけど」

「だったら言うなよ」とは言えず、黙って横をすり抜け、靴に足を突っ込んだ。

「最近、成績が落ちているみたいね。あなたをあの学校に「入らしてあげた」のは、勉強してもらったため、だからね？」

途中で出て行くことも出来ず、ただ黙って聞いていた。

反論を飲み込んでドアを押し開けた時、目の前に現れたのは、どんよりとした曇り空。

僕はまた溜息をついてしまった。

結局、塾にも遅刻してしまった。

そこで既に「お怒り」を買ったのだが、小難しい数学の問題に直面した時、ある疑問が頭に浮かんで、全く問題に集中できなくなってしまうた。

講師に集中力がどうかと言う説教を食らったのだが、それすら右から左に抜けていった。

「僕は何故、生きているんだ？」

帰り道、頭の中を揺さぶっている疑問を呟いてみた。

こんな言葉が浮かんだことに

その答えが見つからなかったことに

涙がこぼれそうになった。

家についてからも、ずっと上の空だった。

答えを探す以外に頭が働かない。

「武、早く食べなさい！」

「あ……うん……」

箸でつまんだご飯を口に入れ、噛み始めた。

(……?)

飲めない。

飲み込めないのだ。

腹は減っているはずなのに、喉がうまく機能しない。

僕はコップをとり、口の中の物を胃まで流し込んだ。

三十回も四十回も嚙んだのに、丸呑みしたときのように喉で引っかかる。

涙が出る前にそれを拭き、次の一口をほおばった。

何とか食べ終わり、追いつてられる前に風呂に入った。

ずっと、風呂場だけは安息の場だった。

湯舟に浸かっている間は、殴られたりすることも、文句を言われることも、問題を目の前に出されることもないからだ。

だがしかし、ついにここもそんな場所ではなくなってしまうたよう
だ。

湯舟に浸かり、目を閉じたとき、瞼の裏に時田の顔が浮かんできた。

僕は溜息をつき、「消えろ」と頭の中で呟いた。

この程度、いつものことだ。

が、時田は底意地の悪い笑みを浮かべるだけで、一向に消える気配がなかった。

「探したって見つからねえよ」

「彼」は言った。

「てめえに生きる意味

価値なんてねえんだからな……！」

大きな水音とともに体が起きた。

水面を見つめている僕に聞こえるのは、水滴が落ちる「ポチャン」という音だけだ。

僕はそれ以上、そこにいることが出来なかった。

風呂から上がった僕を見て、母が驚いたように言った。

「あら、珍しく早いわね」

僕は適当な返事を返し、部屋に入った。

そして、ベッドに倒れこむ。

もう、余計なことは考えたくなかった。

幸い、自分でも分かるほど早く、僕は眠りに落ちていった。

草薙が僕の顔を上から覗き込んでいた。

背筋が寒くなるほど冷たい目をしている。

彼女は無表情のまま言った。

「……………死ねば？」

（ハッ！！）

汗びっしょりで目覚めたとき、本当に誰かが上から覗き込んでいた。

「ふにゃ！？」「ガッ！！！！

慌てて身を起こした僕と「誰か」の顔が思いつきり激突した。

僕はベッドに叩きつけられ、向こうは僕のすねあたりで尻餅をつき、大の字になったようだ。

「イッテエー!!！」

頭の痛みより、足の痛みを先に感じた。

星がちかちかと目の前を行き来している。

「それはこっちのせりふだ、この石頭……!!！」

その声は少し高めで、女か、少年のように聞こえた。

少なくとも、家族のものではなかった。

その「不審者」は、額を押さえて起き上がった。

「石頭はお互い様だろ……!??どうでもいいから早くどけよ」

直接ぶつけたところより、その奥が痛む。

部屋がぐにゃぐにゃに歪んで、ぐるぐる回っているような気がした。

僕はずっと額を押さえていた。

「あー……クラクラする」

「彼」がよつやくどいてくれた。

僕は起き上がってからはっと気が付き、指の間から暗がりの相手をつかかった。

「……Who are you?」

「疲れてるようだな」

「彼」は質問に答えなかった。

風に揺れたカーテンの間から、外の明かりが差し込み、その顔を瞬だけ照らした。

「……!?……」

時田のことを「ハンサム」だとさっき言った。

草薙も目鼻立ちが整った娘だ。

だが、目の前の奴はそれ以上の美形だ。

中性的、というか、少年でも少女でも大丈夫なギリギリの所を保った顔をしている。

そして、Tシャツにジーンズという格好が、細くて長い手足を強調していた。

「……Who are you？」

「その問いは一度無視したんだがな」

「……だからこそもう一度聞いたんだがな」

もう一度風が吹き、今度はカーテンが「シャーッ」と動いた。

外の電灯が映し出した顔は、さっきと同じく全くの無表情だった。

「……何者？泥棒には見えないけど……」

「別に知る必要もないだろ。危害を加える気はない。……それはただの事故だ」

僕はぶつけた額をこすっていた。

無機質な口調に苦笑いを浮かべてみたが、「彼」の表情はやはり動かなかつた。

「彼」は無表情のまま、片手を広げて見せた。

「五日だ」

「……は？」

「後、五日で君は死ぬ。良かったな、望みが叶って」

「……話が読めないんですけど」

「彼」はこっちの言葉には全く反応を示さなかった。

「……用は終わった。時間を無駄にするなよ？」

「おい!!……あれ？」

気付くと、目覚ましの音が鳴り響く中、部屋の天井に向かって手を伸ばしていた。

「武!?遅刻するわよー?」

母がドアの向こうで怒鳴っている。

「……起きたよ」

僕はぼそりと呟いた。

本当は後30分位は寝ていても大丈夫なのだが、仕方なく着替え始めることにした。

(……妙な夢だったな……)

「夢じゃねえ」

僕は後ろを振り返った。

当然のことながら、部屋には誰もいない。

しかし、確かに声がした。

「武!!!!」

空耳かもしれない。

これ以上母を怒らせないために部屋から出た。

「……何？」

「起きてんなら返事位してよ!!」

母は足音も荒く、階下に降りていった。

また一日が始まった。

昨日と同じようにうつむいたまま電車に揺られ、暗い顔で学校までたどり着いた。

校長も昨日と同じ場所に同じ表情　自分が世界で一番偉いと思
っているような顔　で立っている。

まるで変わらない風景。

一歩進んで一歩下がる。

後一歩違う方向に動ければ、それが後退であったとしても、無限ル
ープの今よりはマシだろう。

僕は校長のすぐ横をすり抜けた。

教室までの廊下を歩いていると、自分のクラスからニヤついている
男子生徒が覗いているのが見えた。

彼らは僕の姿を見つけると、こっちを見ながら教室に入っていった。

嫌な予感がした。

「……タケ」

後ろに草薙が立っていた。

「おっす」

「……おっす」

目が合わなかった。

教室のドアを開けた瞬間だった。

「食らえ!!!」

声と同時に緑色のボールらしきものが顔めがけて飛んできた。

僕はそれをよけて「しまった」。

「うわー!!」バシャー!!

後ろで声がした。

(やば……)

「ボール」が草薙に直撃したようだ。

「悪い……」

振り返り、もっとひどいものが当たったことが分かった。

絵の具入りの水風船だ。

赤い水が、彼女の顔から滴っている。

制服にも染みが広がっていた。

「……………!!……………」

彼女が泣きそうになっていた。

「草薙……………」

いきなり肩をつかまれ、黒板のほうに押しやられた。

「ごめん、草薙さん。この馬鹿がよけるから……………」

時田は僕を突き飛ばし、僕は頭から黒板に突っ込んだ。

「……………っっ……………!!……………」

世界がぐるぐる回っているように感じた。

両手を突いて四つんばいになっているのに、まだ倒れそうになる。

と、目の前に影がさした。

見上げると、時田が立っていた。

「謝れよ、草薙さんに……!!」

「!!」

彼が僕の左手を踏みつけた。

「ちょっと!やめてよ!!」

笑い声の中、「すごい姿」の草薙が時田を押しつけようとした。

「草薙さん。早く洗いに行かないと大変なことになるよ」

時田は全体重をかけ、足をぐりぐりさせながら笑った。

食いしばった歯と歯の間から、呻き声が漏れた。

「やめてってば!!」

そこに担任が入ってきた。

そして草薙を見て、目を見開いた。

「……草薙!？」

時田はさっと僕から離れた。

草薙は鼻をすすった。

「……先生、洗ってきますんで、斎藤君一緒に来てもらっていいですか?」

「……あ、ああ」

気圧されている担任やクラスメートを置き去りに、草薙は颯爽と歩き出した。

「タケ!早く!」

「……」

僕も呆然としていたのだが、呼ばれてすぐよろよろと立ち上がり、彼女に続いた。

僕はトイレの向かいの壁に寄りかかって座り、草薙を待っていた。

そもそも、僕はこの場に要らない。

左手をさすりながら、（また時田が話をでっち上げてるんだろうな……）と考えていた。

と、ドアが開き、草薙が顔を出した。

彼女は濡れたブラウスをつまんで見せた。

「やっぱり着替えないとダメか」

一応絵の具は落ちていたが、服が透けて下着が見えていた。

「……………」

「……………あんまり見ないでよ」

「じゅめんー！」

慌てて目を逸らした時、声がした。

(馬鹿、普通自分の服貸したりするだろ!?)

「ナルホド!」と思い、自分のシャツをぱつと脱いだ。

「……タケ?」

「……あ、良かったら……」

草薙はシャツを受け取ると、にっこり笑ってそれを羽織った。

「後で返すね」

その笑顔で、僕の頭の中に一瞬靄がかかった。

そんな中、ふと思った。

(あれ?そー言えば、変な声が……)

「あつれえ〜?……あると思ったのに……」

草薙はロッカーの中をぐそぐそやっていた。

「どっしたの？」

「体操着がなくて……」

僕が自分のロッカーを開けると、思ったとおり、ジャージが入っていた。

「俺のあるけど？」

「ええ〜??」

「使ってないよ!」

「あ、ならありがたく」

「ほら!」

僕は草薙に服を押し付けた。

彼女はひょいと僕らのクラスに誰もいないのを見て、ちよっと目を丸くした。

「……………あれ？もしかして移動？」

「……………美術だ」

「ああ、どーりで誰もいない……………」

「どうでもいいけど、早く着替えてきたら？」

彼女はむっとしたように僕を睨み、さっさと行ってしまった。

僕は肩をすくめ、誰もいない教室に入った。

「はい、ありがとう」

彼女が投げたシャツを受け取り、袖を通した。

「……生温い」

「五月蠅い！」

「ちょっと湿っばいし……」

「黙れ！」

草薙はブラウスの皺をパンツと伸ばし、椅子にかけた。

「乾くかね？」

「さあ……」

僕は窓の外を見やった。

校庭で一年生が走り回っている。

少し、うらやましく思った。

「行く？」

「どこに？」

「美術室」

僕は全く別なことを考えていた。

それで少し焦ってしまっ。

「え、あ……も、もう？もうちょっと休んでいっつよ」

僕が左手をさすっているのを見て、草薙は荷物を下ろした。

「……痛い？」

「……別に」

僕は手をポケットの中に隠した。

空は快晴。

しかし、青空をきれいだと思えない自分がそこにいた。

どやどやとクラスメートが入ってきた。

その後すぐ、チャイムがなる。

「嘘！？授業終わっちゃった!？」

「……みたい」

彼女は歯の間から息を吐き、「シューッ」という音を立てた。

その時、僕の視界の隅に赤い「ボール」が入り、咄嗟に身をかがめた。

「バシャ！」と音が鳴り、今度は窓に水風船が当たった。

草薙が感心したように言った。

「……思ったんだけど、タケって反射神経良いよね」

答える前に時田が掴みかかってきた。

「まあ、だ懲りねえのか！？てめえがよけると、後ろの人とか物が被害を受けんだよ！」

「そもそも、時田が投げなきゃ……ウー！」

再び、彼の右拳が腹にめり込んだ。

そこを押さえて膝をついた僕の頭上に、何かが差し出された。

「……？」

「三度目の正直。爆弾、投……」

「やめて！」

草薙が時田に怒鳴った。

そして、彼と僕の間に入り込もうとした。

「……どけよ」

「ダメ、やらせない」

「ジャージまで真っ赤にしたいのかよ？……って武のじゃねえか」

時田が意地悪く笑った。

「武、後でその服嘗め回す気か？このド変態が」

刹那、草薙が時田の頬を張り飛ばそうとした。

彼はそれを軽くかわし、再び僕めがけて水風船を投げた。

しかし、体勢が崩れていたせいも、それは僕を掠めて通り過ぎ、窓を直撃する。

「「らあ！何やってんだ！？」」

ちょうどその時、数学教師が教室に入ってきて怒鳴った。

「誰だ！？やったのは！？」

教師は、窓の一番近くにいた僕を睨んでいる。

時田はその視線を追い、ニンマリ笑った。

(……………おいおい……………)

「コイツです」

嫌な予感は的中する。

時田は躊躇いもなく僕を指差した。

そして、教師もそれを全面的に信じた。

「斎藤！拭け！」

「……………はい」

「タケ！？」

「……………無駄だよ」

僕は溜息をつき、雑巾を取りに行った。

時田のニヤついた顔が腹立たしかった。

でも目を伏せ、黙って教室を出る。

嘲りの視線が多数。憐れみが少し。

そして怒りが、教師と、もう一人。

草薙がこっちを睨んでいた。

「てめえのせいで全弾無駄にしちまっただろ！」

声に振り返ろうとして、いつの間にか床に転がっていた自分に気付いた。

こめかみに痛みが走る。

蹴り倒されたらしい。

蹴られた場所はもちろん、床にぶつかった肩、背中もズキズキした。

焦点がずれて、全てがぼやけて見えた。

「おい、立てよ！」

襟を掴まれ、引っ張られた時、急に視界が鮮明になった。

見たくなかった。

クラスの連中は笑っているか、何もなかったかのように振舞っているかだった。

時田に屋上まで引きずられている時も、半分上の空だった。

教室に草薙がいなかったが、彼女がいたらどうという反応をしたんだろう、と考えていたのだ。

が、胸をどつかれ、地面に転がったとき、現実に引き戻された。

「何取り澄ましてんだよ？」

時田はしゃがみこみ、身を起こした僕を、再度突き飛ばした。

「……立て」

自分で突き飛ばしたくせに、時田は僕を立たせた。

思った通り、やさしさとか、人間性とかがそうさせたわけではなかった。

ドグー！！

僕が必死で固くした腹筋に、彼の拳が衝突した。

いつものような苦しみはない。

「へえ……」

時田は感心したように僕を見た。

「少しは学習したみたいだな」

「……」

「……武、レバーブローって知ってるか？」

僕はそんなもの聞いたこともなかった。

そう答える前に、時田がぐっと沈み込み、僕の右脇腹にこぶしをぶち込んだ。

「う……」

体が横に曲がった。

僕はバランスをとることが出来ず、右に倒れた。

腕の外側をすりむいたが、今の所、そんなことは気にできなかった。

口を大きく開けて、息を吸い込もうとしているのに、空気が入ってこない。

肺に何かが張り付いている。

完全に固まってしまっていた。

「生意気なことすっからこっということになるんだぜ……?」

髪の毛をぐいと引っ張られ、持ち上げられた。

ブチブチっという音が聞こえてきた。

時田は僕が苦しんでいるのを満足したらしい。

彼は最後に僕の顔を地面に叩きつけると、そこからいなくなった。

僕は身動きしなかった。

動けなかった、というのもあるが、それだけではない。

僕は痛む部分をさすったり、血の味のする唾をどっにかすることもしなかった。

ただ目をつむり、息を殺していたのだ。

そうすることで、日常と化した「非日常」をやり過ぎそうとしていた。

もちろん自分でも、それが最悪の行動だと気付いていたのだが。

そう、自分の中に渦巻いている、「もう、どうしようもない」とか、

「死ぬしかない」という言葉すら、やり過ぎることは出来なかった。

「タケ？」

目を開けると、燃えているような空を背景に、草薙が覗き込んでいた。

「……何事……？」

僕は身を起こし、肩をすくめた。

「……いつもと同じだよ」

「……なんで！？何であの時抗議しなかったの！？」

「あの時……？」

受け答えるのもエネルギーを消費する。

ぼんやりと、「何で草薙は怒ってるんだろ……？」と思った。

「先生に拭けって言われた時！」

「……ああ」

僕はその答えを口に出したくなかった。

草薙は目を逸らすと、屋上のフェンスまで歩いていった。

そして、しばらく夕日を見つめていた。

「……タケ、帰ろう」

僕は黙ったまま頷くと、重い体を持ち上げた。

やっとのことで家にたどり着き、夕食も食べず、着替えもそこそこにベッドに倒れこんだ。

もう、うんざりだった。

11 (前書き)

今回は少し長目です。

「オイコラ！」

誰かが僕を起こそうとしている。

薄目を開けてみると、部屋はまだ暗かった。

「……なんだよ……？」

「なんだよも糞もねえ！さっさと起きろ！！」

「分かったから怒鳴るなよ……」

起き上がると、すぐ傍に昨夜の「少年」の顔があった。 本当
に息遣いが聞こえるほど近くに。

（……また夢か）

と思うと、すーっと「彼」の手が伸びてきて、僕の顔に触れた。

ヒヤッとしている。

「……朝にも言ったが……」

「彼」はニヤリと笑い、僕の頬を思いっきりつねった。

「イテ！！何すんだ！？」

「これで分かっただろ？」

「彼」は頬をさらにグイと引っ張り、表情を消した。

僕は体をのけぞらせ、その手から逃れた。

「彼」はまたニヤリと笑った。

「夢じゃねえってな」

「……！」

僕は頬をさすりながら、呆然としていた。

(これ、マジで現実?)

「彼」は冷たく言った。

「で、本題だ」

「なあ、ちょっとやり過ぎじゃないか？」

僕は口を尖らせた。

夢だろうとなかろうと、頬の痛みは尋常じゃなかった。

「あん？」

「軽くやる程度で十分「夢じゃない」って分かるだろ」

すると、「彼」はこっちを馬鹿にしているように鼻を鳴らした。

「俺の怒りが少しこもっていたからな」

「怒り？」

「彼」が身を乗り出した。

「それが本題だ」

「は？」

暗闇の中でも、「彼」が睨みつけているのが感じ取れた。

「テメエ、なんで「一日」を無駄にした？」

「ハハ、今まで無駄じゃねえ日なんてなかったけどな」

僕は笑ったが、向こうから笑い声は聞こえなかった。

その顔に外の明かりが当たったとき、「彼」がものすごく真面目な顔をしていたので驚いた。

「あゝ……冗談なんすけど……」

「……お前さ、昨日の話覚えてるか？」

「え？ああ、俺が後五日で死ぬとか何とか……」

「彼」が僕の胸倉を掴み、ぐっと顔を近づけた。

「しっかり覚えてんじゃねえか！！」

「今！今、思い出したんだよ！」

「……信じてねえな？」

目を覗き込まれて居心地が悪く、僕は顔を背けた。

「……まあ」

「……別に信じなくていいけどな、お前の命は後四日でなくなる。これは事実だ」

僕は目をしばたいていた。

(いや、信じる奴、いないだろ)

「まあ、俺も信じた奴は見た事ないが」

どうやら、考えてることが読まれているらしい。

「じゃあ、夢ってことにしといてよ。そんなこと信じたくもないし」

「そうなのか？」

「少年」が意外そうな顔をした。

僕はその答えに、まじまじと「彼」を見つめてしまったが、その意味することに気が付き、思わず目を逸らした。

「……別に信じてもいいけどさ、一つ、聞いてもいいかな？」

なんでもないかのような声を出そうとしていたのだが、自分の声がとても奇妙に聞こえた。

しかし、「彼」には普通に聞こえたらしい。フンと鼻で笑った。

「……死因とその後、つてどこか？」

「はあ？」

すると「彼」は眉をひそめ、手を離した。

「じゃあなんだ？何を聞きたい？」

「まずはあなたの名前だ」

「はあ？」

「彼」は「何をほざいているんだ？」とでも言いたい表情をしていた。

「……なんで？」

「特に意味はないかな？」

向こうからあからさまな溜息が聞こえた。

「……適当に……」「ネモ」とでも呼んでくれ」

「……潜水艦……」「ノーチラス」だっけ？はどこ？」

ネモ、というのは「海底二万マイル」という小説に登場する人物の名前だ。

確か「Nobody」とかいう意味だったような……。

「……意味ぐらい知ってるだろ、この言葉の」

「まあ一応」

ネモは「なら分かんのだろ」と呟いた。

「じゃあ二つ目……」「パンドラ」って知ってるか？」

「あん？ああ、あれだろ？神から「絶対にかけてはいけない箱」を受け取った女だろ？ギリシャ神話だっけ？」

「……そう。そして、箱の中身は……」

ネモが頷いた。

「この世のありとあらゆる災厄……中身を知らなかったパンドラはその箱を開けてしまい、それが世界中に広まった……だろ？」

思ったとおり、ネモが知っているのはそこまでだった。

「……実は、それには続きがあるんだ」

「へえ？」

ネモは興味を抱いたようだ。

「パンドラが急いで蓋を閉めたから、一つだけ、箱の中に残ったんだ」

「一つだけ？何が？」

「なんだと思う？」

ネモは一瞬考え込んだが、すぐに降参のポーズをとった。

「ダメだ。見当もつかない」

「……」「未来の事が分かってしまう」という災厄さ」

ネモはハッと目を見開いた。

「だから人は希望を持って

」

いつの間にか、ベッドの上に横たわり、目覚ましの音を聞いていた。

僕は大きく溜息をつき、頭の上あたりの時計を叩いてから、続きを呟いた。

「生きていくことが出来る」

僕は限りがあるはずの無限地獄に身を投じた。

(おい)

ネモの声がした。僕は部屋を見渡しながら呟いた。

「……夢の中だけにしてくれよ。はっきり現実だって分かっていると
ここで死刑宣告なんて受けたくない」

部屋にネモの姿はなかった。

(……信じたほうが、楽にならないか?)

姿が見えないのでなんとなく、天井に向かって微笑んだ。

「でも、やっぱり……生きたいじゃんか」

もう、ネモの声は聞こえなかった。かわりに母が叫んだ。

「武!!」

「はいはい、起きてますよ……」

何も変わらない、どこにも救いのない日常がまだ、続いていく。

人に押しつぶされながら、ずっと考えていた。

ネモは「死」で僕が救われるかのようなことを言った。

もしそれが本当なら、「生」が苦しみということだろうか。

確かに僕は、ついでに言うと周りの人たちも、楽しんではいない。

「生」が苦しみ

もしそうなら、人は苦しむために生まれてくるのだろうか。

「生」が苦しみ

そういう話をどこかで聞いたことがあった。

「生」が苦しみ

確かあれは「輪廻転生」の考え方だ。

悟れば、「生」を繰り返す、無限の苦しみから解放されるといっ
…。

「生」が苦しみならば……

「タケ!!!」

はっと気付くと、草薙が目の前で手を振って見せていた。

「お、おはよう……」

「大丈夫？さっきから全く反応なかったけど……」

「ちょっと考え事を……」

僕がそう言つと、途端に草薙の表情が曇った。

何より、目が変わった。

それはは絶望を感じている目だった。

「……………??」

しかし、彼女が目を逸らしてしまったので、その訳を尋ねることはできなかった。

乗り換えの駅で降り、階段に向かって二、三歩歩いてから、彼女が横にいないことに気が付いた。

「……………?」

振り返ると、草薙は降りたところで立ち止まり、こっちを真剣な表情で見つめていた。

人の流れが、僕らを迷惑そうに見ながら行過ぎていく。

「……………タケ、死なないでよ」

彼女は本気で言った。

僕は当惑してしまい、言葉が出てこなかった。

しばらくして、彼女は目を逸らした、

「……………私は……………」

草薙はそれきり、口をつぐんだ。

彼女が下唇をきつくかみ締めているのが見えた。

向かいのホームのアナウンスで我に返った。

「……………行くぞ。遅刻するよ」

「……………うん」

草薙は目をあわせようとしなかった。

(……………自殺か)

僕もまた、彼女の視線から逃げながら思った。

考えたこともない、といえば大嘘だ。

それこそ数え切れないほど、何度も「死にたい」と思った。

でも今、この瞬間まで踏みとどまっている。

ついさっきまで、「僕が臆病だから死ねなかった」と思っていた。

「死ぬ勇気がなかったから」と。

もちろんそれもある。

ただ、それだけではない。

僕も「明日」「ささやかな「変化」が起こることを期待して毎日を生きていたのだ。

生きることが苦しみではなかった頃のおかげで、僕の心の奥底があきらめることなく、生きてこれたのだ。

今、僕が苦しんでいるのが事実でも、これから先も、ずっと苦しみ

続けるとは限らない。

「生」は苦しみじゃない。

僕はそう思った。

ただ……

「タケ、着いたよ！」

草薙に引っ張られて電車を降りる時、体が冷たい感覚にとらわれていた。

(その、「先」があるかどうか……)

僕はネモの言葉を信じかけていた。

その上、「終わり」が近い事を知り、安堵している自分がここにいる。

知らない内に学校にたどり着いていた。

校長がいつものように生徒に挨拶している。

ああすれば生徒を飼い馴らせるとでも思っているのだろうか。

彼らの言う、「模範的な生徒」になるとても。

僕は俯き加減で、その横を擦り抜ける。

すぐに声が追ってきた。

「挨拶位したらどうだ!？」

僕が聞こえなかった振りをすると、後ろで草薙が謝った。

「すみません！」

肩越しに振り返ると、校長がこっちを睨んでいた。

僕は肩をすくめて先に進んだ。

草薙は僕に追い付くと、腕を掴んで止まらせた。

「ちょっと！あの校長、めんどくさいんだから！」

「……………ごめん」

僕は顔を背けた。

心を読まれてしまうような気がした。

「……………タケ、先生達は助けてくれるよ？」

僕は思わず振り向いた。

信じられなかった。

「……………それ……………まさか本気で言ってるの？」

草薙は目を見開き、手を離した。

彼女が怯えているようだったが、僕は構わず続けた。

「担任があんな風にしてんの見ていて？」

草薙は顔を背ける。

僕は苛立ち半分、悲しさ半分でそこから立ち去ろうとした。

しかし、再び腕を掴まれた。

「……なんだよ？」

「……信じてみてよ。もしかしたら……」

「無駄だよ」

僕は腕を振りほどいて歩き出そうとしたが、尚強く掴まれただけだった。

「何でそんな……!!」

「分かりきってんだよ!!」

僕は男子トイレに入った。

草薙も手を放した。

その日は時田の機嫌が良かったらしく、そこまでひどくは殴られな
いまま、午前中の授業が終わった。

昼休みも少し小突かれた程度で、「ここ二、三週間で一番平和な日
なりそうだった。

嵐は大しけの前兆だと聞いたことがある。

よく知られている言葉だと、「嵐の前の静けさ」か。

まさにそれだった。

風が吹き始めたのは放課後すぐだ。

「武！」

時田が絡んできた。

「……何？」

「忘れてたんだけどよ、一昨日言った五千円……」

「皆」

僕らが教室の前のドアのほつを見ると、そこから担任が頭だけ出していた。

「体育館に集合だ」

時田は訝しげに彼に尋ねた。

「先生、何で？」

「緊急の学年集会だ。早くしろよ」

そついうと担任は頭を引っ込めた。

それとほぼ同時に時田が僕をにらみつけたが、僕にはそれがなぜか分からなかった。

先に体育館に来ていた先生方は、そろいも揃って険しい顔をしていました。

嫌な感じだった。

（誰か死んだのか？）

なんとなく、彼らが僕を見ないようにしている気がした。

嵐がすぐ近くまで来ていた。

「皆さん」

学年主任の女性教師が（大半に嫌われているくせに、変に馴れ馴れしいオバサンだ。どうでもいいことだが、僕は大大嫌いだ）、妙に静かで、妙に神経を逆なでする声で言った。

「昨日、生徒の一人からの訴えで、いじめがこの学年に存在していることが発覚しました」

辺りがざわついた。

皆が気にしているのは「誰が訴えたのか」ということで、その事実があることに驚いている奴は一人もいない。

教師は声を張り上げた。

「静かに!! 静かにしなさい!!」

皆が静かになると、彼女の声はおとなしく　　そして気色悪くな
った。

「学年の先生たちで相談して、こういう形を取りましたが、当事者
たちはことを公にしたくはないでしょう」

僕はとてつもなく嫌な予感がした。

「ですから、学校側は詳しいことは調べません」

何かを聞き間違えたか、教師が言い間違えたらしい。

そんな風に思った僕を置き去りにして、彼女は続ける。

「いじめをしている生徒は、これ以降はやめるように。いじめは悪

いことなのです」

彼女はさらに何か話し始めたが、僕にはもう何も聞き取れなかった。

言葉が全く届いてこなかったのだ。

が、落胆はしなかった。

何か問題が起こると必死でそれを隠そうとする奴らに、何か出来る
と期待するほうが間違ってる。

でも僕は、溜息をつかすにはいられなかった。

僕の周りの奴らが立ち上がった。

解散が告げられたらしい。

その途端、ものすごい力で肩をつかまれた。

「イテ！」

振り返らなくても誰だか分かる。

そして、何の用かも。

「テメエ、ちくりやがったな!？」

「ちが……!!」

反論は顎への一発で封じ込まれた。

時田は僕の襟を掴んで、強引に引きずり出した。

脳が揺れて意識が飛びかけていたが、彼がクラスの男子に声をかけながら、屋上に向かっているのは分かった。

もう、どうでもいい。

生が苦しみだとか、そうじゃないとか、そんな難しいことを考えてなんになるんだ。

今日の前にあるのは、そんなに難しい話じゃない。

苦しみ。

ただ、それだけだ。

僕は自分に無理矢理背負わせた、ささやかな「希望」
いつか来る「明日」に「何か」が変わるはずだという考え
自分を離れていくのが分かった。
この先
が、

「希望」なんて知ったことか。

来るはずがない。

僕は思った。

「明日」なんていつでも、「今日」の繰り返しに過ぎないんだから。

冷たい決意を固め、目を開けると、ピンクの空が広がっていた。

痛む体を無理に動かし、ふらふらとフェンスに向かう。

今日はいつもよりひどく痛む。

そりゃそうか。時田だけじゃなく、クラスメートの男子のほとんどに殴られ、蹴られたんだから。

しかも時田の指示により、彼らは腹の辺りを中心的に攻撃してきた。

内から湧き上がる強い吐き気を抑えるために、今にも漏れてきそつな呻きを封じるために、口は開かなかつた。

有り難いことに、フェンスの高さは胸ぐらいまでしかなかった。

これなら今の状態でも乗り越えられる。

フェンスに手をかけた瞬間だった。

「タケ！？！？」

驚いてる間に草薙が僕のシャツを掴んでフェンスから遠ざけた。

そして、尻餅をついてる僕を怒鳴りつける。

「何考えてんの！？」

僕は怒りを感じた。

あまりに激しすぎて、怒鳴り声を出すことも出来なかった。

「…………邪魔すんなよ…………」

「馬鹿！！タケが死んだら…………！！」

「…………草薙に…………何が分かったよ！？」

正直、うんざりだった。

こいつらに分かるわけがない。

救う手を持たなくせに人の道を封じるなんて、偽善以外の何物でもない。

「…………これしかねえんだよ…………！！道は…………！！」

「違つー！！」

草薙は僕の胸倉を掴んだ。

しかし、僕にたいした反応は出来ない。

彼女は僕を揺さぶった。

「ねえ！ちゃんとこっちを見てよ！」

僕はそうしなかった。

まともに目を合わせられるはずがなかった。

「「死」は逃げ道じゃない！！」

草薙は吼えた。

僕は内心舌打ちをする。

そんなせりふうちの親でも、あの教師達でも言える。

草薙は必死で自分を抑えながら、ゆっくり手を放した。

「なんで？なんで何もしないで死のうとするわけ！？何かしてからだって遅くないでしょ！？」

僕は掴まれていた場所をさすりながら呟いた。

「……何かしたって……」「明日」「も」「今日」と同じだからだよ

「そんな訳ない！」

草薙はすぐに否定した。

僕が反論の意思をなくすほど（も）とからそんな気力はなかったが（きつぱりじ）。

彼女は空を指差した。

「あの雲は昨日と同じ？あの夕焼けは？ちゃんと見て！」

僕は空を見上げ、首を横に振った。

草薙が「でしょ?」と言った。

その声がとてもやさしく聞こえたが、僕はまだ納得はしてなかった。

「……………今日の電車はすいてたか?」

草薙は一瞬と惑ったようだが、すぐに首を横に振った。

「そこにいる奴らの顔は明るかったか?校長は?俺らのこと考えてたか?」

草薙は僕の問いにことごとく首を横に振った。

最後の問いの時も、迷いはなかった。

「ねえ、何?」

僕はまだ続けた。

「星座の形は?太陽の大きさは?地球の自転の速さは?」

草薙は訝しげに首をかしげた。

「……いつもと同じだろ」

草薙は「分かった!」という顔をしたが、すぐに顔をしかめた。

「そうだけど……」

僕は間髪いれずに言った。

「明日も同じだよ」

草薙はほんの一瞬だけ空を見上げたあと、僕に向き直った。

「……変わろうとしてないから、変わらない」

僕は初めて草薙の顔を見上げた。

彼女は自分の言葉に大きく頷いた。

「……きっとそうだよ」

「……じゃあ、夕焼けは変わろうとしてるって？」

草薙は大真面目に言い切った。

「多分。いや、絶対」

僕は笑ってしまった。

声を出して笑う僕を、草薙が覗き込む。

不思議とその顔がぼやけた。

「タケ……？」

彼女が僕の頬を触る。

「泣いてるの……？」

僕はそう言われて初めて、視界を覆っている代物に気がついた。

「あ、あれ……??」

拭っても拭っても、涙が流れる。

それにも笑えたが、涙だけは止まらない。

「おかしいな……」

「ゴメン、タケ……ゴメン……」

笑いながら泣く僕の横に、謝り続ける草薙がいた。

僕は訳も分からず、顔を上げて彼女を見た。

彼女のつぶった目からゆっくり流れた液体が頬をぬらし、顎まで届いて滴り落ちる。

それを見て、僕の涙は止まってしまった。

「…………草薙？」

「…………ゴメン…………！」

彼女はうつむいた。

それで彼女の涙が一気に流れた。

僕はすっかり狼狽していた。

「あ、わ、え〜っと…………」

慌てた僕は、自分の涙を袖で拭き取った。

「…………何謝ってるのか分かんねえけど…………」

草薙は頭を大きく振った。

「私なの…………」

「え？」

草薙はしゃくりあげた。

「……先生に言ったの、私なの……！！」

彼女はやっとそう言うと、下唇をかみ締めた。

僕に彼女を責める気は毛頭なかった。

ただ、ぼろぼろと涙をこぼす草薙を見て、何も言えなくなってしまったのだ。

それで、ぎこちない手つきで彼女の頭をなでるのが、僕の精一杯だった。

(ヴィー……)

草薙は鼻をすすりながら携帯電話を取り出した。

「……あ……」

「……親でしょ？」早く帰れ」「か、」どうしたの？」「もしくは」「今どこ？」「ってどこか」

「……二番目」

僕も彼女も、まだ涙声だった。

「……帰れる？」

「……タケも一緒なら」

僕はまた笑ってしまった。

「一緒だろ？方向同じなんだから」

「……さっき飛び降りる気満々だったくせに」

それを聞いて、そのまま固まってしまった。

そうだ、僕は死ぬつもりだったんだ。

不思議と、今はそんなことは思わなかった。

僕は強張った頬を緩め、笑いなおした。

「……もう、そんな気はなくなったよ」

「本当!？」

草薙の顔がパアツと明るくなった。

「もう二度とあんなことしない!？」

僕は目を逸らした。また笑顔が消えていくのを感じた。

「……それは答えかねるな……」

嘘はつきたくなかった。

それが正しいかどうかは別にして、だ。

僕は無理に笑って立ち上がった。

「……でも、今はしない。早く帰ろう」

しかし、草薙は僕の腕を引っ張った。必死さが伝わってきた。

「ダメ！二度としないって約束して！」

「……無理だよ……」

僕の声は自分でも驚くほど弱弱しかった。

「約束できない……」

こっちをじっと見ている草薙とは目を合わせないようにして立たせ、何とか微笑んでみせる。

「……帰ろう。これ以上遅くなれない……」

草薙は顔を背け、鼻をすすった。

帰り道、僕はずっと、窓の外を見ていた。

鏡のようになり、僕の顔を映している、その向こうに焦点を合わせ
て。

外はどこも光の粒に満ちていた。

僕が向かうべき光はどこにあるんだろう。

それを見つげる前に、地上を通る時間が終わった。

世の中、まがい物の灯台がありすぎる。

嵐の中、頼れるのは光だけなのに、僕にはどれも偽物に見えた。

結局、話どころか目も合わせないまま、駅についてしまった。

僕と草薙の家は駅こそ同じだが、そこからの方向は逆だ。

「……送るよ。もう夜だし」

「……いい。逆に私がタケん家までついていきたくらいだし」

「……今日は死なないって言ったろ」

「……それにタケと二人で私ん家まで行ったら、余計に面倒くさいことになるよ」

彼女は充血した目を指差した。

「……まあ、確かに」

「じゃ、明日。……タケ？」

「あ、ああ……」

草薙は何度もこちらを振り返りながら、階段を上っていった。

僕はその後姿が消えてから、自分の出口に向かった。

「何をやってたの!？」

母は僕を頭ごなしにしかり、「塾もただではない」とか「もっと頑張らなきゃいけない」というような主旨のことをわめきたてた。

それで僕は、目を見れないまま何度か謝った。

あまりにあっさり謝られて収まりがつかなくなった母は、不満げに

ぶつぶつ言いながら引き下がる。

僕は体中にある痛みを表に出さないようにして二階に上がった。

特に意味はないが、そうしなきゃいけないような気がした。

食欲はなかった。

昨日と同じく、ベッドに倒れこむ。

(ほら見る、無限ループだ)

眠りに落ちていく中、そう思った。

「……起きろって……」

「……ネモ……?」

「ほら、起きろ!」

僕は三度ネモにたたき起こされた。

欠伸しながらぼやく。

「……人を一瞬で眠らせられんなら、逆だって……」

ネモはやはり無視した。

「……酷い一日だったな」

「……これだって「酷い」と……」

彼はかまわず続けた。

「でも、忘れんなよ?後三日だぜ?」

僕が何も言わないでいると、ネモがこちらをちらりと見て、不快そうに唸った。

「なんだよ？」

「お前さ、人の話を完璧にシカトすんのやめるよ」

「あ？俺がいつお前の話を無視した？「聞こえてなかった」の間違いだろ」

ネモは笑ったが、冷たい笑い方だった。

彼はそれをすぐに引っ込め、僕を指差した。

「で、非常に疑り深い「トマス」君」

「……「トマス」って……」

「トマス」は疑り深い者の象徴だ。

十二使徒の一人で、キリストが復活したことを聞いた時、それを信じようとはしなかったと言われている。

「……酷いな。こっちは信じる気になつたつてのに」

「「トマス」も最後まで疑っていたわけじゃないだろ？ま、それはそれとして、何がお前を動かしたんだ？」

（畜生、知ってるくせに……）

「馬鹿、知らねえよ」

「ほら、心読んだ」

「……あんな」

僕はしかめっ面で立ち上がった。

「……考えたんだ。色々」

思えば、考えれば考えるほど、答えから遠ざかっていた。

今、ようやく考えがまとまってきた。

「……俺はこのままだと、間違いなく死ぬ。……自分から」

屋上から身を乗り出した時に浮かび上がった感情を思い出した。

密室から久々に抜け出したような、久々に新鮮な空気を吸い込んだかのような気分だった。

「「逃げ」だろうと、「自分勝手」だろうと、今いる場所から抜け出せるんだったら、何の躊躇いもなく飛び降りるし、椅子も蹴れると思うんだ」

ネモは何も言わずにこっちを見ていた。

「でも、後三日なら、それ以外の方法で何とか逃げ切れる」

「……時田からか？」

僕がかぶりを振った。

「この「ループ」から」

「……戦略的撤退って奴だな」

ネモが笑いながら言った。

気付いたら天井を見上げていた。

まだ、部屋は暗い。

ネモが暗闇の中に立っていた。

「……まだ早いぞ？」

僕は呻いて時間を確認した。

起きなきゃならない時間まで後小一時間。

「……でも、二度寝して起きれるとは思えねえ……そのイヤホンとってくれ」

ネモが投げたコードを受け取り、携帯につないだ。

程よい軽快さを持っている音楽が他の全ての音を掻き消した。

母が怒鳴った。

「武!!」

音を止めたと同時にネモが呟く。

(逃避行の始まりだな)

僕は曖昧に頷き、制服に着替え出した。

それを見たネモが不思議そうに言った。

(……おい、何してんだ?)

「着替えだよ。ってか見て分かるだろ！」

(逃げんじゃないのか?)

彼が制服のことを言っているのにようやく気が付いた。

「あの親が私服で外に出すわきゃないだろ？」

「あ、なるほど……」

「人に見られてると思うと、着替えにくいんだが」

「あ？あ、ああ……」

ネモの気配が消える寸前、眩きが聞こえてきた。

「気にしねえ奴は、俺の目の前でベッドに「お相手」を連れ込んでたけどなあ」

天井に枕を投げつけても、空しく落ちてくるだけだった。

家を出た後、何も考えずにいつもの地下鉄に乗ってしまった。

(…………あ)

(マヌケ、無意識だった)

ネモは溜息をついた。

それで僕は意地を張る。

(……………違いよ！このまま終点まで……………)

(彼女が見てるのにな?)

その言葉に辺りを見回すと、少し向こうにいた草薙と目が合った。

「あ……………」

草薙が目を逸らす。

僕は目を閉じ、手すりに寄りかかった。

(誰も見ちゃいないよ)

返事はなかった。

乗り換えの駅は、この地下鉄の乗客が多く降りる駅だ。

僕はその人ごみをかわし、車内に残った。

(……よし)

うまくいった。

恐らく、草薙にはばねずに済んだ。

耳障りなブザーが鳴り、扉が閉まった。

その時。

暗い顔でエスカレーターの上に並んでいた草薙が、ガバツと顔を上げ、こちらを振り向いた。

思い切り目が合う。

最初から僕の位置を知っていたかのように、彼女の視線はぶれなかった。

唇が「タケ」と動いた。

草薙が二、三歩ふらふらとこちらに踏み出した時、ようやく電車が動き始める。

呆然と立ちすくんでいる草薙が、ゆっくりと窓の端に追い込まれていく。

僕は目を伏せた。

電車の加速が妙に遅かった。

(…………うまく、振り切ったな)

(…………ああ…………)

僕は唇をかみ締めた。

終点に着いたのは、大体40分後だ。

ホームに降り、辺りをきよろきよろ見回してしまった。

いつも通っている駅と大差ないのに、なんだか落ち着かない。

そこに誰もいなかったからかもしれない。

ヴヴヴ……ヴヴヴ……。

携帯が鳴った。公衆電話からだった。

「もしもし?」

「タケ!？」

「……草薙……」

「何やってんの！？今どこ！？まさか死ぬ気じゃないよね！？」

草薙はすごい剣幕だった。

「……死ぬ気はないよ。只、学校に行く気もない」

すると、草薙は少し安心したようだった。

「……そう……良かった……」

「……と、言うわけだから。じゃあ……」

「待って」

切らせてくれなかった。

「……なんだよ？」

「……逃げ道はいつかなくなるよ？」

「……長いこと逃げるわけじゃ……」

「それに！」

草薙は僕の言葉を遮った。

「逃げたって何の解決にもならない……でしょ？」

「……じゃあ、どうしろって……？」

僕はベンチに座り込み、目を押さえた。

「戦って死ねってか……？」

「そんなこと言ってない！只、戦う前に逃げるのは……」

「誰が！？」

僕は吼えた。

「誰が戦う前に……!?!」

僕にとっては、この毎日が戦いだった。

生きていくことが。

しかし、草薙もまた怒鳴り返してきた。

「決まってるでしょ!?!」

彼女の声は、携帯を耳から離しても聞こえるほど大きかった。

「殴られても、蹴られても、黙ったままの誰かさんよ!?!」

何も言えなくなってしまった。

差し込まれた感があった。

「……また黙る！戦いもしないで、何かが変わる訳ない！」

「……そう……だな……」

僕の口調が、草薙の声をも変えた。

「……」

「え？」

「……何もしてないし、何もされてない私が偉そうに……」

彼女の悲しそうな声に、僕はまた何も言えなくなってしまう。

草薙は繰り返した。

「……」

しばらくして、電話が切れる。

恐らく、コインを入れることを忘れていたのだろう。

いや、もしかしたら、彼女が切っただけかもしれない。

(行かないのか?)

しばらくしてネモが尋ねてきた。

僕はベンチにずっと座っていた。

この間、この駅には電車も、人も、全く現れなかった。

(……逃げようとするのは間違いかな?)

ふと横を見ると、何事もなかったかのようにネモが腰掛けていた。

足に肘をつき、顎に手を当てている。

その状態のまま、ネモは肩をすくめて見せる。

「さあな。俺に聞かないでくれ」

「……じゃあ、誰に聞けっつてんだよ！」

僕は立ち上がり、時刻表を覗き込んだ。ネモが顔を上げる。

「……おい、そりゃ戻る電車だぞ？」

「そんなくらい分かってらあ！」

彼は「あつそ」と呟き、またさっきの姿勢に戻った。

僕は呟いた。

「……やめるか」

「はあ？」

僕は地面に置いたかばんを拾い上げた。

ネモは体を起こし、僕を見た。

「何を？」

「「戦略的撤退」」

ホームの端で時計を見上げ、間もなく電車が来ることを確認する。

ネモはすぐ後ろまで歩いてきた。

「……やめてどうすんだ？」

「戦う」

口に出してみて、なんて陳腐なせりふなんだろうと思った。

「時田と？」

ネモは昨日の夜と同じ事を聞いてきた。

それで僕も、同じように首を横に振る。

「……じゃあ、何と？」

「分からない……」

正直な答えだった。

「でも、このまま終わりたくないじゃんか」

その時アナウンスが流れ、電車が入ってきた。

僕の目の前の車両には、誰一人乗っていなかった。

(珍しいこともあるもんだ)

僕は電車に乗り込んだ。

「……おい！」

振り返ると、ネモはホームにとどまっていた。

「……戦ったからって、勝てるとは限らねえぞ」

「……勝てるとは思ってない」

僕は呟くように言った。ネモが眉間にしわを寄せた。

「……ただ、何かを変えられるはずだと思ってるだけだ」

ネモは心配そうにしていた。

彼のそんな表情を初めて見た。

「……それも難しいと思うぞ」

僕は笑った。

自分でも別人だと思うほど、快活な笑い声だった。

「……死ぬ気でやれば、出来ないことなんか無いよ！」

あの独特な音がして、扉が閉まった。

心配そうなネモを残し、僕だけの電車が動き始める。

簡単だよ。

本気でそう思った。

人は少なくとも、後二、三十年は生きられるように出来ているはずだ。

僕だって、例外じゃない。

ちゃんと燃料は与えられているだろう。

生きていられるのが残りわずかなら、そのわずかな時間に燃料を燃やして尽くせばいい。

そうすれば、どでかい火柱が

天まで、届くはずだ。

学校に着いたのは11時半。

どうしようもなく微妙な時間だ。

校門の前で入るか入るまいか迷っていると、苦々しさを全面に出した声がした。

「……………遅刻か」

まるで、極悪事件の被告を断罪するかのような言い方だった。

一体誰だろうと思って振り返ると、右手に火のついた煙草を持った校長「先生様々」が、仁王立ちして「いらっしやっただ」。。

「……………理由は？」

「……………特に何も」

彼は煙草を口につけ、深く吸った。

一瞬間をおいて煙を吐き出したかと思うと、煙草を地面に落とし、足で踏み潰した。

「……早く入れ」

校長の言葉や行動のせいで、胃がムカムカする。

「……道は」

「なんだ？」

彼は僕の言おうとしている言葉を知らず、煙草の箱を取り出した。

「道は喫煙所じゃありません。当然、灰皿でも」

校長が動きを止め、顔がみるみる怒りに染まっていったが、取り出した箱は元に戻した。

「……余計なことを言うな！」

「余計なこと」？先生にとって「耳が痛いこと」「は皆余計なことですか？」

「下らんこと言っていないで、早く授業を受けろ！」

僕は校長を睨み、かばんを担ぎなおした。

「ずるいですね」

怒りが体中を駆け巡っていた。

「都合が悪いことは拒絶するか、追い払うか、とはね」

校長が何か言おうとしたが、僕はさっさと校門をすり抜けてしまった。

幸い、彼は追ってこなかった。

「タケ!!」

ちょうど休み時間だった。

草薙は僕を見つけた途端、ほっとした様子でよってきた。

「気が変わったの？」

「……まあ、そんなところかな？」

その時、案の定時田もまた、すぐに絡んできた。

「学校一のちくり魔は、遅刻魔でもあったみたいだな、カス」

彼は唇を吊り下げて笑い、僕を上から見下ろしていた。

目を逸らしかけた自分をしかりつけ、その忌々しい目を睨み返した。

「……昨日は言いそびれたけど、あいつらに言ったのは俺じゃない」

時田は「それがどうした」と笑った。

「どっちにしる先公達は動かないし、お前を散々痛めつけてやったから、また訴えるような馬鹿も出ないだろ」

「……テメエは何を勝ち誇ってるんだ？」

「タケ!？」

「あ?」

時田の右手が僕の髪の毛を掴もうと、伸びてきた。僕はそれをとっさに叩き落した。

「イッテ!！」

その次は、あまりに早くて反応できなかった。

時田は叫ぶと同時に、もう片方の手で僕の胸倉を掴みあげたのだ。

「……テメエ……！」

その時はラッキーだったというしかない。

ちょうど数学教師が入ってきたのだ。

「はい、席ついて〜」

この一触即発の雰囲気には気付かないらしく、実にのんきな声だった。

時田は僕を睨みつけていた。

そして、椅子に突き飛ばした後、自分の席へ戻っていく。

僕は深く息を吐き出した。

その数学の授業中だ。

突然、息が苦しくなった。

(……………!?!……………)

胸の辺りの服を掴んでも治らない。

むしろ酷くなるような気がしてくる。

鼓動と共鳴して、肺に痛みが走った。

(ドッ) ドッ ドッ
(

気付いたら机にうつぶせになり、歯を食いしばって胸を押さええていた。

「斎藤……………おい、起きろ!」

頭を少し持ち上げ、前を見ると、教師が黒板を叩きながら怒鳴っていた。

痛みは続いている。

「寝てるってことは理解してるってことだよな!？」

(……んな無茶な……)

「これを解け！」

目がかすんで、問題が見えない。

何とか姿勢を正そうとした時、チャイムが鳴った。

「チツ……斎藤、次は寝るんじゃないぞ！」

僕は黙ったままだった。

「何も言えなかった」というのが正しいのだが。

「返事はどうした!？」

僕は何とか声を絞り出す。

「……は、はい……」

満足した教師が出て行くと、草薙が時田よりも早く側によってきた。

「大丈夫!？」

「……さあ……?」

鼓動は徐々に穏やかになっていった。

「なんだなんだ?」

時田が薄ら笑いを浮かべながら近づいてきた時。

「来ないで」

草薙が僕と時田の間に割り込んだ。

「どうせ、痛めつけるだけでしょ！？もうやめて！」

一瞬時田は動きを止めたが、次の瞬間には声を上げて笑った。

「ハハ、たいしたボディガードだな！武」

彼の嘲笑が突き刺さってくる。

僕は目を伏せたまま立ち上がり、草薙の肩に触れた。

「……タケ」

「……いいよ。ありがとうけど」

「武、意地張んなよ！」

時田はまた嘲笑った。

「どうせ、お前は草薙さん以下であることに変わりはないからな」

「……どういう意味だ」

「そのまんまだよ、カス」

彼の声は良く響いた。

気付くと、クラス中が息を殺して僕らを見ている。

「下の下の下にいるお前が、普通の人間に保護してもらおうのは何もおかしくねえって言ってんだ」

怒りに駆られて反論しようとした瞬間。

さっきの激痛が再び僕を襲い、その場にしゃがみこんでしまった。

「タケ!？」

時田の困惑した視線と、草薙が傍によってくる気配、それに自分の意識が飛んでいくのを一辺に感じた。

光を感じたが、何も見えなかった。

目を閉じまゝ、光源を見ているよう感覚だ。

そんな中、ネモの声が聞こえた。

(……………感謝しろよ)

「……………何の話だ？」

(誰のおかげであの場から抜け出せだと思ってんだ)

「……………まさか、あれは……………」

(そう、俺がやった)

それを聞いて、単純で尚且つ静かな怒りが浮かんできた。

「……余計な事を……」

(何?)

「何でそんなことした？俺を助けるためか？悪いが、ありがた迷惑だ」

ネモは言葉に詰まったが、すぐ怒った声が返った。

(馬鹿野郎！お前、あのままいたら……)

「時田にガチで喧嘩売ってたからな。ボッコボコかもな。だけど、それがどうした」

ネモが黙ったままなので、僕は彼の姿を探しながら続けた。

「少なくとも、こんな逃げ道使っよか「何か」を変えられるだろ？」

(……分かったよ!!)

彼が不機嫌に言った。

(俺が悪かった。後は勝手にやれ。ただし……)

何も見えないはずの世界が急速に回転し始める。

同時に、ネモの声が脅すような雰囲気を帯びた。

(この先、お前の身に何が起ころうと、俺は見てるだけだ。それで良いんだな?)

「良いも糞も、それがお前の仕事なんじゃないのか?」

彼は答えなかった。

そして、回転していた世界がぐっと上昇していった。

……いや、僕が落ちているだけかもしれない。

それは何の前触れもなく、闇に変わった。

僕は見ることが諦めた。

「…………ネモ？」

「タケー!!」

目を開けると、草薙が覆いかぶさるように覗き込んでいた。

その近さに僕は目をしばたいた。

僕がピクリとでも動いたら、鼻の頭が彼女の顔にかするんじゃないかと思うような近さだった。

「草薙…………？」

彼女はほっと息をついて離れた。

ほっとしたような、残念なような。

僕は身を起こし、辺りを見回した。

そこは保健室だった。

どうやら、僕がさっきまでいた世界はどこか遠くに吹き飛んでしまっただけらしい。

「気が付いてよかった。ビックリしたよ！急に気絶しちゃったもん……」

「……何がどうなったんだ？」

「分かんない。タケは胸押さえて倒れちゃっし、保健室は開いてたけど先生は出張しちゃってるし……あ、そういえば、大丈夫なの？」

「……もう平気……かな。草薙がここまで……？」

草薙がふるふる首を振った。

「……ううん。時田が……」

「あいつが!?!」

「騒ぎを聞いて入ってきた先生が、一番体の大きい時田に頼んでこいませう」

「なるほど」と思った。

そうじゃなきゃあいつが何かしてくれるとは思えない。

「……今何時？」

「四時。このまま起きなかったらどうしようかと思った」

僕はベッドから足を下ろした。

「……なんだっただらう？」

「……………さあ……………とじろでせ」

草薙は僕に荷物を渡しながら言った。

「「ネモ」って何回も言ってたけど、「海底二万マイル」の夢でも見てたの？」

「……………夢だったら良かったんだけどな」

「え？」

僕はそれには答えず、彼女を促して帰路についた。

(悪かったな)

ネモが眩いた。

駅で草薙と別れたとき、走れば塾に間に合う時間だった。

「お!！」

しかし僕は、二、三步走っただけで、急ブレーキをかけて止まった。

突然馬鹿馬鹿しくなってしまったのだ。

ポケットに手を突っ込み、ことさらゆっくり歩きながら、一人で呟いた。

「もうすぐ死ぬってのに、なぐにが塾だ」

「そんなしかめっ面すんなよ」

限界まで細くした目でも、隣に並んで歩くネモは見えた。

「……なんかさ、俺、疲れたよ。まだ何にもやっちゃいないのにさ」

「何もやってないことないだろ」

僕が振り返ると、ネモは肩をすくめた。

「……校長に歯向かい、時田に喧嘩売り……十分「何か」していると
思うんだが」

「……でもさ、何も「やり遂げてない」」

僕は暗い気持ちになった。

そう、僕は何一つ達成していない。

しかし、ネモが何気ない口調で言った。

「人間なんてそんなもんさ」

僕はその言葉に足を止められた。

ネモは少し微笑んでいた。

「何かをやり遂げて死ぬのはほんの一握り。未練なく逝った奴なんて、いやしないんだよ」

ネモは「行こうぜ」と促したが、僕は立ち止まったままだった。

「?.....どうした?」

「.....でも、そうなりたいじゃんか」

僕がそういうと、ネモは声を上げて笑った。

馬鹿にしているような笑い方ではなかった。

それが事実かどうかは別として、僕には彼が「分かっているよ」と言っているような気がした。

僕が歩き出した時、彼の姿がいつの間にか消えていた。

家に入るとすぐ、母が居間から出てきた。

「武？塾は？」

「今日は休む」

僕は二階に上がろうとした。

しかし、母はヒステリックにそれを止めた。

「武！？どついつこと！？そんな余裕があるような成績ではないはずでしょ……」

「……体調」

「は!？」

僕はうんざりしながら繰り返した。

「体調が悪いから休む」

「体調?風邪?」

僕は肩をすくめた。

「学校で倒れちゃってさ。貧血っぽいけど」

「大丈夫なの!？」

「分かんないから休むんだよ」

そう言って僕は階段を上っていった。

「……………」

部屋に入ると、ネモの姿がベッドの上にあった。

端に座り、こっちを見ている。

「……………」

僕は肩をすくめて、ベッドに寝転がった。

「体調悪いから寝る！」

「はあ！？」

僕は目を閉じた。

「おい！起きろ！！」

「あは？」

「……もう9時だ。そろそろ下に下りたほうがいい」

「……サンキュー……」

僕は目をこすりながら、部屋を出て行った。

母は心配そうだったが、理由は単純極まりない。

「塾や学校に行けないと、その分勉強が遅れてしまう」からだ。

僕は黙ったまま食事や風呂を済ませ、早々に部屋に戻った。

部屋では、ネモがベッドに横になり、天井を見上げていた。

「ほら、どけ。俺の寝床だ」

彼は不機嫌そうに唸り、体を起こした。

「分かってるな？後……」

「「二日だ」ってか？引き算ぐらい出来るっつもの」

「ああそうかい！！」

ネモがイラついているのを見て、生意気な口をきいたのを少し後悔した。

「さあて、何しよう？」

僕がそう言つと、ネモは不思議そうに首をかしげた。

「どっしり……？」

「何か建設的なことをやろうかと思ってサ。Art is lo
ng」って言うじゃんか？」

ネモは半ば馬鹿にしているような 少なくとも僕はそう感じた
目で僕を見た後、こっす尋ねた。

「なんか得意なもんでもあるのか？」

考えてみよう。

絵、幼稚園児レベル。

音楽、致命的。

彫刻、聞くまでもなく。

結論。

「ないな。全部苦手」

ネモは呆れたように笑った。

「何残すつもりだよ。ってか、人間、皆考えることは一緒だなあ。どいつもコイツも、最期の一瞬は芸術家になれると思ってやがる」

「そりゃ、皆自分が生きてたって証拠が欲しいじゃん」

僕がそういうと、ネモは大きく溜息をついた。

「皆そう言うよ。それで皆何かを残そうとする」

「……じゃあな」

僕はニヤリと笑った。

「朝言ってた、「ベッドに「お相手」を連れ込んだ男」は何を残したんだ？」

「あの男は何も残さなかった」

ネモはニヤニヤ笑っていた。

「あ、でも、残そうとはしてたぜ？」

「へえ、何を？」

「自分の子孫。お前も、あの娘で試してみたら？」

自分の顔がぱつと赤くなるのが分かった。

ネモはそんな僕を見て笑い転げている。

「テメエ！！」

ネモはピタリと笑いを止め、ファイティングポーズをとっている僕を指差した。

「それは笑われて怒ってるのか、想像しちまった気恥ずかしさの八つ当たりか、どっちだ？」

僕は固まってしまった。

「なんだ、後ろの方が」

ネモは「やれやれ」と首を振った後、また吹き出した。

「ネモ！！」

「悪い悪い！！」

ネモは笑いながら言ったが、僕が睨むと声を立てるのはやめた。

しかし顔はにやけている。

「安心しろ。男なんて皆そんなもんだ」

そう言うってからネモはまたクスクス笑った。

僕は「やれやれ」と溜息をついた。

いつものことだが、瞬きの間に朝になっていた。

僕は目をこすった。

「……なんでこう、瞬時に寝かせるんだ？」

(まあ、いろいろとな)

ネモは誤魔化した。

電車の中、いつもどおり人ごみにもまれ、立ち位置が段々とずれていく。

電車が一際大きく揺れた時、僕は隣の人にぶつかってしまった。

「すみません！って、あ……」

草薙は腕をさすりながら僕を睨みつけた。

「肘入れた？わざと？」

「いや、その……」

僕の狼狽の原因は分かってもらえると思う。ネモの笑い声が聞こえてきた。

(しるさい！)

(あ、馬鹿、顔が赤くなってんぞ！)

(この野郎！！)

「…………タケ？」

僕は頭の中でネモと会話している勢いのまま、草薙に噛み付いてしまった。

「は！？…………あ…………」

「はあ？何、いきなり？」

草薙は不機嫌に言った。

「…………いや、その…………考え事を…………」

「考え事？」

彼女に覗き込まれて一歩下がりがりかけたが、満員電車の中ではそうもいかなかった。

「うわっと！」

「？一体何なの？」

「……ゴメン」

とても気まずい沈黙があった。

教室はいつもと同じだった。

いくつかの談笑の輪があり、皆が楽しそうに話している。

自分がやけに場違いに感じられた。

ここにはいけないと思った。

その心を読んだように一人の男子が声を上げる。

「おい病気持ち！…うつすんじゃないぞ！…」

その時（僕は無視するつもりだったのだが）、草薙が過剰に反応した。

「何が病気よ!? 馬鹿じゃないの!?!」

あまりの剣幕に、僕も、笑った男子も驚き、動きを止めた。

「一人でいじくる力も、度胸もないくせに……ホント、あんた馬鹿!?!」

彼は目を瞬かせ、何も言い返せなくなってしまったらしい。

草薙の迫力に「吞まれた」とでも言おうか。

まあ、無理もないな、と僕も目を瞬かせながら思った。

と、草薙がその剣幕のまま、僕のほうに振り向き、僕は思わずたじろいだ。

「タケモ!!! なんで黙ってんの!?!」

「え、あ……」

僕が答える前に、嘲るような声がした。

「怖いからだよな、腰抜け」

時田が意地の悪い笑みを浮かべていた。

草薙が口を開く前に、僕は目で彼女を牽制し、止めた。

「……タケ……？」

「……別にお前らなんか怖くねえよ」

嘘ではない。

恐怖はなかった。

僕はぼそりと呟いた。

「……どうせ、死ぬだけなんだから」

それは時田には聞こえなかったらしいが、草薙は目を見開いた。

「タケ……!?!」

「なんつったんだ?」

時田が明らかに僕を見下しながら近づいてきた。

「訂正しちまえよ、武。『本当は怖くて仕方ありません』ってさ」

穏やかな口調ではあったが、迫力はものすごかった。

周りの顔から笑みが消えた。

草薙ですら一歩後ずさった。

「それから土下座して、地面に頭を擦り付けろよ。そしたら許して

やってもいいぜ」

「……許す？」

僕は後ずさるうとして、体を必死で抑え、そこに立っていた。

頭とは違い、身体の方は恐怖に震えているらしい。

例えでもなんでもなく、足に力が入らない。

膝の震えがどう頑張っても収まってくれなかったのだ。

それでも僕は、何とか声を絞り出した。

「……なんだよそれ。まるで、俺がいつも何かしてるような言い方だな」

時田は視線を落とし、（ほぼ間違いなく僕の足を見て）ニンマリ笑った。

「昨日のだよ」

彼はこれ見よがしに右手をさすってみせた。

「思いつきり叩き落してくれたなあ。こりゃ、賠償金もらえねえと引っ込めねえなあ」

僕は黙っていた。

周りが半分面白がって、半分がいつもと違う何かを感じ、息を呑んで見つめているのが分かった。

僕は声が震えたりしないよう用心しながら言った。

「……いいぜ、払ってやるよ」

「タケ!？」

僕は草薙を無視した。

目をやることもしなかった。

僕はただ、時田を見ていた。

彼は唇をめくり上げて笑う。

「そうそう、蛆虫は蛆虫らしくしてりゃいいんだよ」

「寄生虫はそつちだろ！」と叫びたかった。

しかし、僕はそれを飲み込んだ。

「……いくらだ？」

時田は唇の端を吊り上げたまま、右手を広げた。

「五万だ。期限は明日。分かったな？」

彼は笑いながら自分の席に戻ろうとしたが、話はまだ終わってなかった。

しかし、僕が呼び止めようとするより早く、草薙がカバンを床に

たたきつけた。

ものすごい音が響き渡り、見て見ぬ振りを決め込んでいた奴らを含め全員がこつちを振り向いた。

そして最後に、時田がゆっくりと振り返った。

「草薙さん、なんか用？」

「……いい加減にして」

草薙はぎよっとするほど静かに言った。

「何がしたいの？ タケを苦しめてそんなに楽しい？」

「はあ？」

時田は嘲笑をそのまま形にしたような反応を示す。

「馬鹿でしょ。楽しみに決まってんじゃない」

そんな台詞を予想していなかったのか、草薙は一瞬言葉に詰まった。

そして時田が完全に馬鹿にした口調でさらに続けた。

「草薙さんは良い子ぶって「分かんない」って言うだろっけど」

彼が目配せすると、いつも時田のそばにいる連中が声を上げて笑った。

草薙はその笑い声に当惑しながら反論しようとした。

「別に良い子ぶってなんか……」

しかし、時田は聞いてもいなかった。

「快感だよ、カイカン。蟻をつぶすのと一緒にだよ」

彼が目を上げ、僕を見た。

そう、虫けらを、いや、靴底に張り付いたその死骸を見るかのような目で。

「ただ、タケシは蟻より良いぜ」

彼はニタリと笑った。

「蟻の表情は分からないしな」

僕はぞわりと悪寒が走り、後ずさった。

知ってはいた。

時田は悪意の塊なのだ。

でも知っているからと言って、それを目の当たりにして動揺せず
いられる奴もいない。

草薙も目を見開き、多分に恐怖の混じった表情で時田を見つめてい
る。

それに気づいた時田は意地悪く笑った。

「おっと、気をつけないと、先生に怒られちゃうな」

彼の目配せでまた何人かが笑った。

「……………」

僕と草薙が顔を見合わせたその瞬間。

「センサーに言いつけるよお!!」

時田は声色を変えて叫んだ。

途端に草薙が青ざめた。

それを見て時田はさらに笑った。

「知ってんだぜ、草薙さん。あんたが先公にちくったって」

彼女は何も言わなかった。

時田は口元に嘲笑を浮かべながら続ける。

「意外となんも考えてないんだね。あいつらが動くとも思ったの？」

「……私は……」

草薙の声が震えている。

彼女が何を言おうとしたにしろ、時田はそれを冷たく遮った。

「あんたが余計なことしなければ、武があんなにひどく殴られることもなかったのにな」

僕は思わず目を瞬いた。

そんな無茶な責任転嫁があるもんか。

でも草薙はそうは思わなかったらしく、視線を落とし、白い顔で黙っている。

僕が驚く一方、時田はさらにニンマリ笑った。

「マジ偽善者だよな。何？」「タケを助ける！」とか思っちゃったわけ？」

刺して、ねじ込む。

そんな物言いだった。

草薙は悔しそうに唇を噛み締めている。

「……………草薙……………」

僕は彼女を慰めようとしたのだが、言葉が出てこなかった。

「ハッ、泣いてんの？」

時田が草薙を覗き込み、無神経な笑い方をした。

草薙は反射的に顔を背け、自分の真横の床を見つめる。

「マジつけるな！ 意味分かんねえし！」

そして始まった笑い声を聞き、僕は一気に頭に血が上るを感じた。

「時田……！！！」

しかしその時、草薙が僕の前を横切ると、「あ」と息を呑んでいる間に教室を出て行ってしまった。

顔は見えなかったが、その後姿は明らかに泣いていた。

時田は嬉々として大声で叫んだ。

「チクリン退治完了〜！！」

そして拳を高らかに上げ、ゲラゲラ笑った。

一緒に起こった笑い声の中で、僕は初めて、クスクス笑いながら何事かを囁いている女子連中を目にした。

それこそ、彼女たちも悪意を顔にたたえ、嬉々として話し合っている。

僕はその理由に気付き、愕然とした。

（なんだ、気付いてなかったのか？）

とネモが呆れたように言った。

（お前の味方になるっていうのはそういうことなんだよ。だからこそあの娘も今まで躊躇ってたんだ）

僕の混乱はおさまらない。それを見て、ネモは鼻で笑った。

(明確な理由なんて要らないんだよ。明確なきっかけさえあれば、
仮想敵国のお前に味方するってのは分かり易過ぎるきっかけだろ?)

確かに、その通りだ。

一旦始まってしまえば、もう理由なんて要らない。

そうでなくても僕らは欠点だらけなんだから。

(でも)、と僕は思う。

(許されるはずがないじゃないか)

時田は蟻を踏み潰すようなものと言った。

でも、僕はその「蟻を潰す」ということでさえ躊躇いを覚える。

蟻だって生きているのだから。

それに、だ。

僕はすでにカウントダウンを始められそうなほど「最期」に近いが、草薙は違う。

彼女は生きなければならないのだ。

恐らくは時田も、あの女子連中もいる中で。

「……待てよ。話は終わってない」

気付くと僕は、去っていかうとしていた時田の後姿に声を投げつけていた。

身体も恐怖を乗り越える程、強い決意が腹の底に沈んでいた。

「……あー??」

時田がこっちを向く。

僕はその目を睨みつけた。

「……俺が払う前に、お前が払うべきだろ、時田」

時田の顔から表情が消えた。

僕は早口で続けた。

「賠償金だよ。少なくとも、お前の10倍はもらわねえと割りに合
わねえ」

一瞬全てが静まり返った。

時田は全くの無表情のまま僕を睨みつけていた。

昨日までの僕だったら、いや、さっきまでの僕だったら、恐らく後
ずさっていただろう。

ただ何故か、このときの僕は時田の視線を跳ね返そうと、その場に
とどまっていた。

「ハ！」

時田が笑い出した。

顔は笑顔になったが、目は全く笑っていなかった。

「お前、殺されたいのか？ え？ ゴミクス」

彼の笑顔でない笑顔に、僕はとてつもない恐怖を覚えた。

それはその場に居た全員が同じだったらしい。

ほとんどの奴らが後ずさった直後、時田が一步こっちに踏み出した。

「どつした、なんか言えよ」

僕が口を開きかけたその時、まれに見るタイミングのよさで担任が教室に入ってきた。

「はい、席ついて」

彼はいつもどおり、何も見ていない。

この緊迫した空気も、僕と時田が睨みあっているこの状況も、その周りを取り囲む生徒の動揺も。

しばらくして彼は、僕たちがそのまま静止してるのによろやく気づき、驚いて教室を見回した。

「……どうした？」

クラスメートたちは時田を見た。

それにつられて担任は時田を見、そして、時田が見ている僕に目をやると、「またか」という風に顔を歪めた。

そしてすぐに名簿に視線を落としてしまった。

「席につけ。出席を取るぞ」

2秒後、時田が向きを変え、自分の席に戻っていった。

そして、他の面々が動き始め、僕も自分の席に倒れこんだ。

それと同時に、またネモが言った

(宣戦布告の時点で疲弊しきってるな)

ネモの言うとおりだ。

でも、それでも、戦わなきゃならない理由が僕の中に、それに、空
っぱの隣の席にある。

何といっても、後今日を含めても二日。

そのくらいは戦える。

そのくらいは戦っていたいのだ。

29 (前書き)

若干過激な描写かもしれませんが。

「じゃあ、授業の準備を」

「うわあゝ、しよっぱな体育かあゝ」

皆が荷物を用意して教室を出て行く。

僕も行くこうとしたとき、突然ものすごい力で引っ張られた。

「痛!!! 放せよ!!!」

しかし、時田は薄ら笑いのまま僕を引っ張り続けた。

彼は服の破れる音も無視した。

放されたのは屋上に着いた時だ。

「放された」というより、「投げ飛ばされた」というほうが正しい。

コンクリートのせいで、両腕に焼けるような熱い感覚が走ったが、痛がる間もなく、後頭部を踏みつけられた。

左の頬に衝撃が走る。

「……ゴミクス、なんか最近、お前、生意気だよなあ」

時田は言いながらさらに力をこめ、足を動かして踏みにじった。

僕は呻くことも出来なかった。

「なあ、ゴミクス。お前みたいなのが人間様に金を要求するってどういうことだ？」

僕は必死で横に転がった。

時田はそんな僕を嘲笑うようにあっさり踏むのをやめる。

「立てよ、カス」

言われるまでもなく、僕は立ち上がった。

そして、「やらなければやられる」という危機感から、自分を奮い立たせて時田に叫んだ。

「……………楽しいか？」

僕は唾を吐き出した。

真っ赤だった。

「何？」

「楽しいかって聞いてんだよ!!」

鼻と唇から出た血が、顎から下に滴っている。

時田はまたさっきの、凄みがある笑顔になった。

「いいや。お楽しみはこれからだ、ゴミクス」

時田はゆっくり近づいてくる。

僕は動けなかった。

蛇に睨まれた蛙だって、もう少し何かが出来るだろう。

僕は彼の視線にすら、抵抗できそうになかった。

手を伸ばせば届く位置にきてから、時田は信じられないほど早く動

く。

何の予備動作もなく彼は僕の胸倉を掴み、力づくで引き寄せながら、僕のみぞおちに右こぶしを突き出した。

ドッ！！

彼の右手は僕が咄嗟に動かした両腕の間をすり抜け。固くしたはずの腹筋を貫いた。

衝撃が走った。

「ガボツ！？」

僕は腹を押さえて膝をついた。

今までとは桁違いの威力。

何がなんだか分からないまま胃袋が痙攣し、その中身を吐いてしまった。

「汚えぞ、ゴミクズ」

彼は僕の背中を蹴り飛ばし、僕は自分の吐いたものの中に突っ込んだ。

直後髪の毛を掴まれ、反吐の中に顔を叩きつけられる。

鼻をしたたかに打ち、また新たに熱い感覚が走った。

時田に何度も頭を地面に叩きつけられ、僕は意識が飛びかけた。

唐突に彼は手を放す。

僕が何も考えずに頭を浮かせると、時田が冷たく笑った。

「甘いぜ」

僕は再び後頭部を踏みつけられ、今度は左目の辺りを打った。

本当に、これ以上ないほどの屈辱だ。

それに何より、ものすごく痛い。

しかし妙に落ち着いている自分がいた。

空からこの状況を見下ろしているかのように、僕の頭の中は冷静だった。

何故僕はこんな目になっている？

「戦う」「というのはいづいづいことなのか？

そもそも、僕は何と戦おうとしてたんだ？

時田が再び力を緩めた時、僕は今度は横に転がって逃げた。

彼が言った。

「飽きてきたな。そろそろ死ぬか？」

僕はのっそりと立ち上がった。

僕が袖で顔を拭い、口の中の血を吐き出す間中、時田は意地の悪い笑みを浮かべたままだった。

ネモに尋ねられた時は「違う」と答えた。

でも、本当にそうか？

「おい武」

彼は相変わらず僕を見下げている。

「頭を下げて、許しを請えよ。そうすりゃ許してやらねえこともねえぞ」

この現状を生み出しているのは、紛れもなく時田なのだ。

「何か」を変える、と僕は言った。

でも、僕が時田を変えられるとは思えない。

そうしたいとも思えない。

「オイ、何黙ってたんだ？」

時田が笑ったまま僕の胸をどついた。

僕は二、三步後ろによろめいたが、目だけは時田を見据えていた。

こいつが悪いんだ。

コイツが。

僕の中を冷たい現実が敷き詰めていった。

綺麗事はもういい。

僕は涙が出るほど時田が憎かった。

消し去ってしまったかった。

ここから。

この世界から。

この僕の人生から。

でも、それはダメだ。

出来ない。

「何故？」

冷たい声がした。

ネモの声かどうかは分からない。

目の前の時田が怪訝な顔をしたところを見ると、どつちやら僕の口から漏れたらしい。

何故？

また僕は頭の中で呟いた。

どうせ僕は死んでしまうのだ。

それも、ほんの一日後に。

一体何を恐れる必要がある？

その瞬間、僕の中で何かが変わった。

「……やってやるっじゃないか」

「何？」

時田が戸惑いを見せた。

あるいは「恐怖」であったかもしれない。

でも、僕にとってどちらでも良かった。

僕は何も考えず、時田に襲い掛かった。

(おい！よせ！！もう十分だ！！)

ネモの声で我に返った。

完全に息が切れていた。

ひたすらに息を吐きながら、じわじわと頭が回りだす。

目の前の情景を理解するのにしばらく時間がかかった。

「……………」
「？」

僕は時田に馬乗りになっていた。

そして左手がまさに彼の頬を殴打したところであり、さらに右拳も振り上げて今にも彼を殴ろうとしていた。

いや、既に何発も、何発も時田を殴りつけたらしい。

彼の顔にその痕があり、僕の手もすりむけていた。

僕は痛む右手を静かに下ろし、ふらふらと立ち上がる。

時田は意識を失っていた。

(……やばいかもしれないぞ)

僕は口元を拭い、ペツとつばを吐き出した。

「どつでもいい」

その時、僕の大嫌いな声がした。

「おい！何をしている！？」

その男は駆け寄ってきて、振り返ろうとした僕を突き飛ばし、時田を助け起こした。

「……………気絶している……………お前がやったのか！？」

地べたに転がってしまった僕は、のろのろと立ち上がった。

顔を見なくても分かる。

この傲慢で、自分は常に正しいとっていて、その上途方もなく無知な男の声。

我が校の校長先生「様々」だ。

「……………一応、そーいう事になりますね」

「私の学校でこんな真似して……………只じゃ済ませんからな！！今はお前よりこの子だ。保健室に運ぶか」

ら、手を貸せ！！」

相変わらず口の中は血だらけで、鼻血も止まらず、踏まれたところなんかがズキズキ痛んだが、頭の中は冷静だった。

そして同時に、激しく怒ってもいた。

「…………お断りします」

幾度となく顔を拭った赤い袖が、段々と黒に染まっていくが、校長は時田の意識を取り戻そうとするのに必死で、こっちを見ようともしない。

「しっかりとしろ！！…………馬鹿者！！ やったことに対して責任を持つッー！！」

「…………言う人間を間違えているんじゃないですか？」

「何？」と校長がこっちを見た。

彼は最初、どういう状態になっているのかわからないようで、僕の顔をまじまじと見つめていたが、それはすぐに衝撃に変わる。

「……どうしたんだ……!?!」

「この状況でそれを聞くんですか? 冗談でしょう?」

僕は可能な限り毒をこめて言った。

こんな奴に助けて欲しくなかった。

たとえ今僕が時田のことを訴えても、こいつらはどうにかして波風が立たないようにする方法を探すだけだ。

それでは何の解決にもならない。

彼らは殴り合えば分かり合えると信じているロマンチスト達よりなお悪い。

そういう連中と違って、教師たちは自分が信じていない考えを押し付けるのだから。

つまり、和解こそが最善の道だという考えを。

殴っても殴り返しちゃいけない。

黙って殴られ続ける。

波風が立つと後が大変なんだ。

彼らが言いたいのはこういうことなのだ。

校長が心配そうに時田を運び出した。

だが、彼が心配しているのは、気を失っている時田でも、血だらけの僕でもない。

「これが公になったらどうなるか」。

ただ、それだけだ。

本当に「大嫌い」だ。

「……君」

「生徒の名前ぐらい覚えとけよ」とも思ったが、「さすがに何百人もの生徒全員を覚えるのは無理か」と思い直し、それについては何も言わないことにした。

「……斎藤です」

「斎藤、ついて来い」

僕は彼の喋り方がいちいち癪に障ったが、黙っていた。

自分のことを偉いと思っている人間に、何を言っても無駄なのだ。

保健の松田先生は僕の顔をまじまじと見つめた後、率直な感想を言った。

「すごい顔！」

この先生は嫌いじゃなかった。

さっぱりとした人だからだ。

「話とか治療とかの前にそこで顔洗いなさい。ホント、すごいから」

二度も言うことないじゃないか、と思ったが、黙って従った。

「……全く、決闘をするような馬鹿がこの学校にいるとはな」

校長の声が聞こえた。

僕は耳を疑った。

「……………決闘？」

僕が振り返ると、彼は憤りの眼差しをこちらに送ってきた。

「覚悟しておけよ。只では済まさんからな！」

僕は呆然としてしまった。

彼は時田のほうを見ながら続けた。

「しかも、相手が気を失うまでやるとは……………！こういう奴が人殺しになるんだ！」

失望と疲労を感じた。

それと多少の悲しみとを。

僕は口をつぐみ、その水道のほうに歩いていくと、顔を洗い始めた。

(……でも、案外正しいかもしれない)

僕は静かに思った。

(僕は時田を殺す気だったんだから)

じやなきや殺されていたのだ。

間違いなく。

と、その時、保健室の扉が開いた音がした。

そして足音がどたばたと近寄ってきて、誰かが僕を無理矢理振り向かせた。

僕は「強引過ぎるだろ」と思いながら、瞬きで目を覆っていた水滴を落とした。

「何があったの？」

草薙だった。

「どうやって知ったのか知らないが、体操服のまま駆けつけてきたらしい。」

何故かとても怒っている。

「また時田でしょ？」

「まあまあ、草薙さん」

松田先生が彼女にタオルを渡しながら言った。

「ちゃんと顔洗わせてあげなきゃ話も出来ないでしょ」

「……………」

草薙は黙り込んだまま、タオルを差し出した。

僕は苦笑しながらそれを受け取り、顔を拭く。

「どこのクラスなんだ？」

校長は草薙に聞いたらしい。

「……………2 - 4です」

「今まだ授業中だ。保健室に用がないならすぐに戻……………」

草薙は言葉が終わる前に、

「気分が悪いので」

と、目も向けずに極めて不快そうに遮ると、校長がそれ以上何か言う前に

「なんでここに張本人がいないわけ？」

と僕に尋ねた。

「張本人？」

「時田」

草薙はきわめて短く答えた。

それで僕は黙ったまま、彼が横たわっているベッドを指差した。

「え？」

彼女はそれを覗き込み、時田の姿を確認すると、

「な、何が起きたの？」

と目を丸くした。

「喧嘩だよ」

僕が答える前に校長が苦々しそうに言った。

「この馬鹿は、あそこの少年が意識を失うまで殴り続けたんだ。喧嘩両成敗とは言うが、しかし……」

「待ってください!!」

草薙が「信じられない」という顔をしていた。

「これはただの喧嘩じゃない!そうでしょ、タケ!？」

僕は黙っていた。

馬鹿馬鹿しいかもしれないが、認めたくなかったのだ。

草薙の言う意味で「ただの喧嘩」ではない、ということ。

「それはどういう意味だ？」

「タケ、話していいよね？」

僕は答えなかった。

ただ、向かいの壁の一点を見つめていた。

「タケはそこに居る時田から、いじめを受けています」

草薙の声が、薄い膜の向こうから響いてくる。

聞きたくもなかったが、耳をふさぐのも億劫だった。

校長はフンと鼻を鳴らし、僕の顔を観察するようじっと見た。

「いじめ、ね。それで？」

草薙はこの男の反応に面食らったようだ。

「……………え？」

彼は冷めた目で草薙を見やった。

「今の時代、いじめなんてそんな珍しいものじゃないんだ。それで

「？」

「なんですかその言い方！」

草薙は本気で怒っている。

僕はぼんやりとその横顔を見つめていた。

「タケは一昨日、屋上から飛び降りようとしたんですよ!？」

「それがどうした」

校長が言った。

「まだ飛び降りちゃいないじゃないか」

「そんな屁理屈……!!」

「屁理屈ではない」

校長は実に憎たらしい口調で言った。

「よくもまあ、いけしゃあしゃあとそんなことが言えるな」と、僕は
はある意味感心していた。

「大切なのは事実だ。たとえば……」

彼は僕を指差した。

「コイツがあの子を殴打し、昏倒させた、ということだ」

草薙が吼えた。

「だから！ それに正当な理由があったって言うてるんです！」

しかし、校長は鼻で笑う。

「理由があれば何をしても良いと？ 話にならないな。そもそも……」

彼はまた僕を見た。

「いじめられる側にも何か理由があるもんだ。それなのに……」

草薙が叫ぶ。

「待ってください!!」

その時、今まで黙っていた松田先生が彼女を手で制すると、にこやかに、穏やかに言った。

「校長先生、「正当防衛」って知ってます?」

校長はムツとした顔をした。

「当たり前でしょう」

松田先生はにこやかな調子のまま続けた。

「なら、今回の件はそれに当たるとお思いになりませんか? 見てください。こっこの時田君は「たまたま」打ち所が悪くて気絶していますよ、斉藤君はひどく痛めつけられていますよ」

「ハ！ 何を言ってるんですか！」

校長は言った。

「この馬鹿者は、いじめられていたんだかなんとか知らないが、相手が意識を失うまで殴ったんですよ？ 過剰防衛にも程があるですよー！」

「……違う」

僕は初めて口を開いた。

「何？」

「俺はそんなつもりじゃなかった」

僕以外の三人が顔を見合わせた。

僕は黙っていらなかった自分に嫌気がさしていた。

校長が毒々しく言った。

「フン、だから自分は悪くないとでも言うつもりか？」

「違う」

言いたいのはそのういづことではなかった。

「気絶させただけで終わらせる気はなかった」

「どっいづ……っ？」

僕は再び口をつぐんだ。

さすがに「殺すつもりだった」とは言えなかった。

言葉が、あまりにむき出しすぎる気がした。

僕はふいに目まいがして、右手で額と目を覆った。

「……もう、帰っていいですか？」

何故かは分からない。

僕は唐突に泣きたくなくなってきていた。

声も誰かがスイッチを切り替えたかのように、涙声に変わってしまっていた。

「……タケ……？」

「話なら明日以降ちゃんと聞きますから……今日はもう……」

明日は土曜日だと言つのに、また学校があるのだ。

僕はそれ自体、何か無茶な話のように感じていた。

ここに入学してから今までずっとそうしてきたのに。

クレイジーだ。

松田先生がすつと立ち上がり、机でなにやらさらさら書くと、それを僕に手渡した。

「はい、斎藤君。早退届」

自分で言い出したにもかかわらず、全くそれを予期していなかった僕は、驚いて顔を上げた。

「松田先生！」

校長がいきり立ったのを尻目に、草薙が右手を上げた。

「先生、私も」

「よし来た」

先生は彼女の分の早退届も瞬く間に書き上げた。

「草薙優さん、と。はい、お大事に」

そして「言語道断！」という顔をしている校長に向き直った。

「良いじゃないですか。一日ぐらい早く帰っても。それに話は彼が起きてからの方が良いでしょう」

校長は「彼」、時田を見やり、僕と草薙をじっと睨みつけた。

そして松田先生に向き直る。

「いいでしょう。その男子生徒は許可しましょう。でも……」

しかし、松田先生のほうが上手だった。

案の定。

「あら、校長先生。女子の「体調不良」という言葉を聞いたなら、男性は気を使っていたら良かったのですが」

僕は思わず「ブツ」と息を噴出した。

そして直後、二人の女性からものすごい勢いで睨まれ、僕は小さく「すみません」と呟いた。

校長も居心地が悪そうに咳払いをすると、いかにも苦々しげに「まあいいでしょう」と言った。

直後、松田先生は

「じゃ、これ、お願いします」

と言って二枚の早退届を校長に手渡した。

「二人の担任の先生に渡して置いてください」

「……分かりました」

そして校長は、僕たちを真正面から見つめた。

僕は一瞬、彼が受け取った二枚の紙をひねりつぶすのではないかと思っただ。

しかし、彼はそうはせず、最後に憎憎しげに付け加えただけだった。

「良いか、今日だけだぞ！」

そして足音も荒く、部屋を出て行った。

「……全く、なんなの、アイツ？」

草薙は本気で怒っていた。

当事者であるはずの僕以上に。

まあそんなものなのかもしれない。

松田先生は小さく（実際、ほとんど聞こえなかった）鼻を鳴らし、体操服姿の草薙に言った。

「あ、草薙さん、ちゃちゃっと着替えてきな。斉藤君は応急処置が終わったら帰すから」

彼女も即座に頷く。

「分かりました。じゃ、タケ、後でね」

僕は黙って頷いた。

何か、僕のペースが完全に失われているような気もしたが、それは別に今に始まったことでもない。

「アハハ、そんなに緊張しなくても」

松田先生は笑っているが、僕は顔をしかめざるを得ない。

「……それ、結構染みるんですよ」

「何言ってるの、小学生じゃあるまいし。ほら、覚悟決めて」

そして彼女は消毒を始めた。

「イテ!!」

「我慢なさい、男だろーに」

「人の目に指突っ込んでそりゃないでしょ!」

「あら、失礼」

彼女はあっけらかんとしていた。

「それよりねえ、斎藤君」

「……なんですか？」

僕はむっとしながら答えた。

しかし、先生は全く気にも留めなかった。

「君はねえ、学校を変えたほうが良いよ」

しばらく、その場所から音が消えた。

唐突過ぎて、僕は何も言えなかった。

「分かっていると思うけど、君が時田君を倒せたのはただの偶然。次、時田君と顔を合わせたら、もっとひどく痛めつけられる……」

そして、教師たちにそれを止める術はない、と彼女は言った。

「私は君が時田に反撃したことが間違이었다とは思わない。でも……」

彼女が手を止め、僕の目を覗き込んだ。

「どう考えても、それ以上戦う必要はない」

しばらく、僕は沈黙を保った。

彼女が作業を再開し、ガーゼやら絆創膏やらを貼り付けていった。

僕はかなり遅れて聞き返した。

「……それ、どういふことです？」

「意味が分からないはずはないでしょ。戦ってるのは君なんだから」

さらりと言つには、あまりに意味深で、強烈な言葉だった。

噛み締め、飲み込むのにひどく時間がかかる。

僕が黙っていると、彼女はパンと手を叩いた。

「はい、応急処置も、押し付けがましい説教もおしまい！」

僕があっけにとられていると、先生は片目を閉じて見せた。

「さ、帰った帰った！ 可愛い彼女を待たせちゃいけないよ！」

僕は声を上げて笑い、立ち上がった。

「一応言っときますけど、違いますからね」

「「まだ」、でしょ。いいよねえ。両想いの子達見ると、「青春！」「って感じで」

僕は慌てて反論しようとしたのだが、松田先生のニヤニヤ笑いと僕を追い払うような手の動きを見て、何故か言葉を失ってしまった。

それで僕は顔の熱さを感じながら、逃げるようにその場を後にした。

楽しそうな笑い声が僕の背中を押していた。

保健室の外で、草薙が僕の分の荷物まで持って立っていた。

「タケ、はい、荷物」

「……サンキュ」

僕は若干うつむき加減でかばんを受け取ったが、草薙は放さなかった。

顔を上げると、彼女が真剣な目で僕を見つめていた。

「何話してたの？」

僕は一瞬前の会話を思い出し、彼女から思わず目を背けた。

「……現在の政治情勢について」

草薙は顔をしかめた。

「くだらないこと言って。学校を変えろって言われたんじゃないの？」

僕は笑った。

少しだけホツとしたのだ。

「分かってんなら聞くなよ」

しかし、草薙は表情を崩さなかった。

「行っちゃうの?」

その言葉が、僕には別の　つまり、「逝く」という　意
味に聞こえた。

「……さあ、分かんないな」

草薙がじっとこっちを見つめている。

その瞳の奥に、僕の「見たくないもの」が見えた気がして、僕は目を逸らした。

「……帰るつぜ」

「……下駄箱んどこで待ってて。ちょっと忘れ物」

目を上げたときには、既に草薙は背を向けていて、表情は分からなかった。

妙にふわふわした感じで下駄箱まで歩いていくと、一段と激しいめまいがした。

それで僕は、下駄箱にもたれかかった。

と、同時に足がずりずり滑りだし、最後にぺたんとして床に座り込んでしまった。

僕の情けない声が一粒こぼれた。

「……………あれ……………」

(疲れてるな)

対照的に確固としたネモの声。

しかし、温かだった。

「……ま、しょうがないでしょ……」

(気張りすぎなんだよ。分かったろ？ 何かを変えるってのも、生易しいもんじゃねえんだよ)

「……後、少しだからさ……」

僕は目の辺りを押さえた。

「……何も残せないなら、何かをするしかないじゃんか……」

ネモは鼻を鳴らしたが、なんだかそれも温かく聞こえた。

「タケー!!」

目を上げると、草薙が心配そうに覗き込んでいた。

「……大丈夫？」

「……さあね」

「僕は何とか立ち上がったが、彼女はまだ心配そうだった。

僕は無理に笑って見せた時、思いついたことがあった。

しかし、それを口に出していいものか、一瞬躊躇われた。

草薙は僕の様子を観察していたが、「大丈夫」と判断したらしい。

「……タケ、行こ」

僕は彼女の顔をじっと見つめ返した。

「え？ 何？」と、草薙が少し戸惑う。

僕は決断した。

腹をくくろつ。

どうぞせ最後だ。

その価値はある。

「……あのね」

「え？」

「明日、どっか行かない？」

草薙はキョトンとこっちを見ていた。

「どっか？」

僕は肩をすくめた。

「どっか、だよ。ここじゃない、草薙が行きたい場所」

彼女の目が変わった。

何か「深い」とでも言おうか。

後ろの感情が全く見えない。

彼女は僕の目を見つめたままで頷いた。

「……いいよ。放課後？」

「……できれば朝から」

真面目な草薙にこんなことを言うのは間違いかとも思ったが、彼女はふっと笑った。

「やっぱりね。……いいよ」

「えっ？」

自分から誘ったのに、相当驚いてしまった。

というか、よく考えたら、校長に「明日話すから」「なんて言っ
逃げてきたのに。」

……まあ、いいか。あんな奴。

草薙に促されて、僕たちは学校から出た。

僕は振り向いてたまるかと思った。

ここにはもう、なにもない。

振り向いてはならないのだ。

残されたひと時のために。

そんなことを考えていた僕は、

「どじするつもり？」

という草薙の問いかけにハッと我に返った。

横を見ると、草薙が首をかしげて僕を覗き込んでいる。

質問の意図がよく分からなかったが、僕は「親にどう説明するのか」ということだと思った。

僕は説明する気などさらさらなかった。

「……私服を持って出てこよう。途中で着替えれば……」

「親には黙っていくってこと？」

草薙は淡々と確認するように言った。

「当然だろ」

僕は目を背ける。

「だって許してくれるはずがないじゃん」

「出かけることじゃなくて」

草薙は横を向くと、僕の視線を追った。

「今日のこと」

「今日のこと？」

当たり前じゃないか。

今まで隠し通してきたのに、なんで今更言わなきゃならない？

「……そんな傷だらけの顔で、どう誤魔化すつもりなの？」

僕は始めて彼女の言わんとするところに気付き、顔の絆創膏に手を当てた。

そうか。忘れていた。

「そう簡単に出してもらえないはずがないでしょ？　いくらなんでも」

「まあ、なんとかなるでしょ」

僕は肩をすくめた。

草薙が何を感じたのかは分からないが、彼女はそれ以上尋ねてこなかった。

勝算はあった。

同じ手を使えばいいのだ。

「明日」。

「明日話すから」と言えばいい。

僕はそれだけで逃げ切れるのだ。

それから僕たちは、最寄り駅に着くまで一度も口をきかなかった。

それも、別れる寸前に待ち合わせ場所と時間を決めただけだ。

ただ単に恥ずかしくなっただけだ。

お互いがお互いを、妙に意識してしまっていた。

僕は家のドアを極力ゆっくり引っ張った。

……ドン！

(……鍵！？)

今の音でもうばれたとは思ったが、音を立てないように鍵を差し

込み、ゆっくり回した。

……カ……チャ

(……ふう)

そっとドアを開け、するりと中に入り込み、後ろ手で鍵を閉めた。

運の良いことに、誰もいないようだった。

それでも僕は忍び足で部屋に上がり、ベッドに腰を下ろした。

「ふあゝ、疲れた」

「で、どうすんだ？音楽か？それとも昼寝？」

いつの間にかネモが隣にいた。

もう驚きはしない。

「うん。そーいう気分じゃないな。あ、ところで、何時ぐらい？」

「何が？」

「タイムリミット」

答えがない。

見ると、ネモはポカンと口を開けてこっちを見ていた。

「……なんだよ？」

「……お前、こっちが心配になるほど「冷静」ってか、「他人事」だな」

ネモが呆れたように言った。

意外だった。

「おや、心配してくれてんの?」

「この馬鹿は本当に理解できてるのか?」ってな

僕は苦笑いを浮かべるしかなかった。

「まあ、半信半疑だからな」

「半信半疑? まだ疑ってるのか? ……まあしょうがないかもし
れんが」

「いや、お前を疑ってるわけじゃなくてさ」

「あん?」

「ただの心持だよ。明日死ぬみたいに行動して、まだまだ生きら
れるように考える」。半信半疑だろ?」

「……その使い方は何かおかしいと思うんだがな」

「まあ、細かいことは気にすんなって。で、何時？」

ネモは僕の顔をじっと見た後で、無表情に言った。

「9時半過ぎ」

「……テキトーだな」

「細かいことは気にしないんじゃないかなかったのか？」

僕がにらみつけると、彼はふつと微笑んだ。

「分かった分かった。9時37分38秒06だ」

「細か！しかも微妙すぎないか？」

ネモはニヤリと笑った。

「人間、死ぬ時間は選べねえんだよ」

僕は頭をよぎった疑問を、一瞬躊躇ったが、そのまま口にした。
遠慮する必要もない。

「逆に……選べるものってあるのか？」

「……何？」

僕は後ろのベッドに倒れこんだ。

天井を見つめっていると、心臓がきりきり痛んだ。

ネモの力ではなかった。

ただ、苦しかった。

「そうだろ？ ネモ。俺たちは生まれる場所も、親も、仕事も、…学校だって選べない」

「でも、仕事とかは……」

「分かれ道に気付くのは通り過ぎた後なんだよ」

少なくとも、僕はそうだった。

「それじゃ選んだことにはならないだろ？」

ネモが答えないので起き上がると、彼はさっと目を逸らした。

僕が戸惑っていると、彼が低い声で言った。

「……それなら、一旦戻って、もう一度分岐点に立つんだよ」

「へ？」

僕は不意打ちを食らったように思った。

ネモが不機嫌に続ける。

「お前ら、進むことばっか考えて、自分が戻れるって事を忘れてやがる」

彼は「よいしょ」と立ち上がった。

「突き進むだけなら、ヤクの中毒者となんも変わらねえんだぞ」

頭がズキツと痛んだ。

その日僕は、目覚ましが鳴る前に飛び起きた。

しかし頭の目覚めは若干遅れ、ぼんやり「今日、何かあったっけ……？」と思った。

その途端、ネモの大きな声がした。

(馬鹿、私服持って駅で待ちあわせだろ!?)

目が覚めた。

ネモが呆れたように笑った。

(全く、そいつは緊張からくるのかねえ?)

「……さあな」

僕は大きく伸びをした後、着替え始めた。

「そういえば、ネモ」

(……誰かいると着替えにくいんじゃないかなかったのか?)

「そんな昔の発言こゝろ忘れた。なあ、俺、昨日そのまま寝ちゃったんだっけ?」

(ああ。俺がお前の携帯でメール送つといたから)

「誰に?」

(お袋さん)

「へえ!」

送信ボックスを開くと、体調が悪くて早退したこと、部屋で寝ていること、塾を休むことを書いたメールが入っていた。

「気が利くな。サンキュ」

僕は教科書類をベッドの下に押し込み、適当な私服をかばんに詰め込んだ。

かばんを持ち上げると、いつもよりずっと、そう、驚くほど軽かった。

(? どうした?)

「……別に」

僕はかばんをちょっと上下に動かした。

「さて、と。じゃ、行ってくらあ」

そして昨日帰ってきたときに持って上がった靴を履いて窓枠に足をかけると、ネモが慌てたように言った。

(バ、馬鹿！ 何やってんだ!?)

身体が勝手にのけぞり、僕は窓から離れた。

「よせよー！」

僕は姿の见えないネモに文句を言った。

「昨日の今日で、親がまともに出してくれる訳ないと思ったただだよー！」

まだ自分の身体が動かない。

ネモに止められているらしい。

（それでも、だよ！　ここ二階だぞ！？）

「大丈夫だよ」

僕は自分に言い聞かせるように言った。

「大丈夫」

ネモは何も言わなかったが、ふっと体の緊張が解けた。

僕はニツと天井に向かって歯を見せた。

「サンキュ」

そして僕が再び窓枠に足を書けた瞬間。

(……………気をつけろよ)

意味深な響きだった。

咄嗟に振り向いてみても、部屋にネモの姿はない。

僕は無人の部屋に向かって笑いかけ、親指を立てると、そこから

ひよいと飛び降りた。

待ち合わせた時間より30分も前に着いたのに、草薙は既にそこで待っていた。

僕は驚き半分、呆れ半分で言った。

「こんな早く来てどうすんの？」

草薙はチラッと時計を確認すると、肩をすくめた。

「お互い様でしょ。さっさと着替えて早く行く」

彼女は言うが早いか、さっさとトイレに入ってしまった。

僕は一瞬唾然としてしまったが、すぐ我に返り、頭を振りながら男子トイレのドアを押した。

男の着替えなんて「これで良いのか？」と思うほど一瞬だ。

たいして、女の着替えは「何をやっての？」と思うほど長い。

僕はジーンズをはき、Tシャツにシャツを羽織るだけで、二分かかったかどうか。

さっさとトイレから出て、向かいの壁に寄りかかって草薙を待った。

一秒一秒が長かった。

人の流れが三回ほど通り過ぎた頃だと思っ。

草薙が出てきた。

「ベタな質問していい？」

彼女はにっこり笑った。

僕には女子の服装を事細かに説明することは出来ないが、ただ、これだけは分かった。

とても……。

（かわいいな、オイ）

ネモが思考に割り込んできた。

僕はぼつと草薙を見つめながら頷く。

それを草薙は自分の質問への肯定と受け取ったらしい（もちろん

ダメというつもりもなかったが。

「……待った？」

僕もニヤツとした。

「全然」

こうして僕の、「最後の日」が始まった。

僕らはまだ駅にいる。

なにせ行き先もまだ決めていないのだ。

「……で、どこ行くんだ？」

「それなんだよね」

草薙は困ったような顔をした。

「「行きたいところ」はあるんだけどねえ」

そういつてチラリと見てきた。

それで僕は「ああ」と呟いた。

「財布の中身がそれに釣り合わないってか？」

「正解」

草薙はにっこり笑った。

僕はほんの少しだけ視線をずらす。

と言っても、向きを変えたわけじゃない。

僅かに焦点をずらしただけだ。

「……で、財布の中身を考えないで「行きたいところ」「は？」

草薙は即座に答える。

「ランドかシー」

「なるほどねえ……そりゃ無理だ」

答えながら僕は、「うっかりしてたな」と思っていた。

どうせ最後なんだから、有り金は全部持ってくればよかったのだ。

よく考えたら、追加すら……

「あれ？」

僕は自分の財布の中身を見て、思わず声を上げてしまった。

「?どうしたの？」

僕はもう一度中味のお札の枚数を確認する。

明らかに多い。

「……予想以上に入ってた」

「へえ？」

しかし、僕の全財産ではなかった。

7割、といったところか。

(気が利いてんだか利かないんだか)

(足りねえってか!?)

ネモが不機嫌に言った。

僕は思わず笑ってしまった(僕が突然ニヤツと笑ったのを見て、草薙は不思議そうに首をかしげながら戸惑った微笑を浮かべた)。

(冗談だよ。サンキュ)

結局、草薙と僕で持っている金額を合計すると、まあそれなりに「ランド」や「シー」は無理だが 遊べる量だった。

僕はパチンと手を叩いた。

「さてさて、予算も決まりましたし、どうするっ？」

「うん……あ、そうだ！」

草薙は指を鳴らして言う。

「見たい映画があったんだ！」

「じゃ、そういことば」

僕が歩き出すと、草薙はその横を軽い足取りでついてきながら、両手を上に伸ばした。

「いやあ、人におごってもらって見れるとは思わなかったなあ」

「へ？」

僕が聞き返しても、草薙は澄ました顔で歩き続ける。

「オイコラ、草薙！」

「ラッキー!!」

草薙はケラケラ笑いながら走り出した。

僕も笑いを堪えながら彼女を追いかける。

「馬鹿、人の話を聞けえ!!」

「ありがとう!!」

堪えきれず吹き出してしまった。

それと同調するように、草薙の笑いも止まらない。

結局僕達は、電車を降り、駅を出て映画館につくまで、いや、映画館の席についても笑い続けていた。

映画は「どうってことのない」 題名を聞いた僕がそう言う
と、草薙はなぜ怒った 恋愛映画だった。

二人が出会い、関係が深まり、こじれ、最後にめでたしめでたし
といった類の。

まあ、女優は可愛かったし、展開もベタだから安心して見ていら
れたのだが……。

(……きまずい)

「恋愛」映画だ。

当然のようにラブシーンがある。

そのたびに隣に座っている草薙の存在が妙に気になった。

最悪だったのは、中盤で二人がベッドの中で囁きあってるシーンだ。

自分に「落ち着け」と言い聞かせながら飲み物を取ろうとした僕は、手すりにあった草薙の手に触れてしまい、それで彼女とはたと目が合った。

直後、僕は真っ赤になって視線をそらした。

草薙も恐らく同じだっただろうと思う。

どちらにも口には出さなかったが、多分、同意見だった。

僕らには早すぎたのだ。

映画が終わり、外に出た瞬間、僕は道の真ん中で大きく伸びをした。

「あゝ……疲れた」

正直な感想だった。

草薙は黙っている。

僕は顔だけ彼女のほうに向け、首を傾げた。

「……草薙？」

草薙は目だけ上げて僕を見た。

小さな子が拗ねたような顔をしている。

そして彼女はボソツと言った。

「……馬鹿」

「はあ!?!」

草薙はそのまま歩いていってしまっ。

僕は慌ててその背中を追いかける。

「待ってよ！」

とその時、彼女の向こうにファミレスの看板があるのが見えた。

途端に僕は、朝から何も食べてないことを思い出す。

「…………腹減ったなあ！」

草薙は立ち止まって振り向き、困ったような顔で僕を見た。

「……………」

僕は若干恥ずかしかったが、口を尖らせて言った。

「なんだよ？」

「……別に」

草薙は看板を見上げる。

なんだか僕は、突然に申し訳ない気持ちが高かび上がってきてしまい、視線を落とした。

彼女の背中が、ふっと溜息をついたように見えたのだ。

「ほら、入るんでしょ？」

彼女は急に優しい調子になり、僕を振り向いてにっこり笑った。

店はガラガラで、すぐに席に案内された。

しばらくメニューを眺めていたのだが、どれもピンと来ない。

ファミレスのメニューというのは、どうしてこんなに「微妙」なラインをついてくるのだろうか。

「……うーん」

草薙が首を傾げる。

「決まった？」

僕は思わず顔をしかめてしまった。

「今唸ってたの見てなかったの？」

草薙は素知らぬ顔で言った。

「私は決まった」

睨み付けると、草薙はクスクス笑ってメニューで顔を隠した。

僕は息を吐き出し、またメニューに目を落とした。

「あ、そういえば、映画おごってもらったの忘れてた」

視線を上げると、草薙が悪戯っぽいキラキラした目でこっちを見ていた。

「はい？」

「代わりにここでいいよ、タケ」

僕は文句を言おうとしたが、口を開きかけて止めた。

「……いいよ。あんまり高いもんだと払えないけど」

「ほえ？」

草薙は目を丸くした。

その顔が面白く、僕は吹き出してしまった。

「ちょっと！何がおかしいの！？」

僕は空咳を一つして笑いを止め、顔を上げた。

「……顔」

途端に草薙は恐ろしい目つきになった。

「……タケ……？」

「……すみませうデシタ」

僕はテーブルに両手をついて謝る。

すかさず草薙がメニューを指差した。

「じゃ、このパフエ」

「へ?」(高っ!)

一杯のパフエの値段じゃなかった。

普通だったら三倍分だ。でも……。

「……いいよ。今日付き合ってもらったし」

そのくらいは当然だな、と思った。

しかし、草薙は顔をしかめた。

「そういつつもりでおこるって言ったの?」

「? そうだけど?」

「タケ、何頼むの?」

心なしか、彼女の口調がきつくなっただよつに感じた。

「……草薙は?」

「私ドリンクバー」

「……遠慮すんなよ。一応金持ってるしさ」

「自分で払うから。あ、頼んどいてね」

草薙は反論を許さず、パツと立ち上がる。

「え、あ、どこに……?」

「お・て・あ・ら・い!」

そしてぶいっつと行ってしまふ。

訳もわからず、僕は取り残された。

注文を終えてすぐ、草薙が戻ってきた。

どこか機嫌が悪いようだ。

「飲み物とっってくるよ。何がいい？」

彼女は推し量るような目で僕を見た。

僕は目を丸くしながらそれを受け止めるしか出来ない。

何を意図しているのかさっぱり分からないのだ。

「……じゃあアイスティーで」

注文を受けた僕は、肩をすくめて飲み物を取りにいった。

考えたって仕方ない。

多分、さっきみたいに、戻ってくる頃にはいつもどおりの草薙であるはずだ。

しかし帰ってきた時も、草薙の機嫌は直ってなかった。

飲み物を渡すと、一応「ありがとう」と呟いたが、それ以降はむっつりと黙り込んでいる。

僕はさすがに困ってしまった。

「……………どうしたの？」

草薙はちらっと目を上げた。

が、すぐにそっぽを向いた。

「……………別に」

「……またかよ」

僕は苦笑いを浮かべたが、草薙は笑わない。

彼女は再び目を上げた。

「ねえ、なんでそんなに遠慮してんの？」

僕は瞬きした。

「……遠慮？」

「私が「同情」とか、「ボランティア」でここにいてると思ってるの？」

僕は彼女の顔をまじまじと見つめた。

そうじゃなかったらなんなのか。

「……やっぱりね」

彼女はアイステイーをクイツと飲んだ。

ちょうどその時、ウェイトレスが僕の注文したサンドイッチを持ってきて、僕は口を開くタイミングを見失ってしまう。

その上彼女が立ち去っても、草薙はそれ以上話そうとはしなかった。

僕は沈黙に耐え切れず、サンドイッチに手を伸ばした。

食べ終わってふと顔を上げると、草薙は頬杖を着き、物思いにふけていた。

テーブルのコップの中の氷を見つめている。

僕はボーツと（もしかしたら半濁音のほうかもしれない）その顔を見ていた。

どのくらいだったのだろう。

草薙が急に顔を上げた。

もろに目が合い、僕はとっさに顔を背けてしまふ。

その顔に血が上ってくるのが分かる。

目が合ったことで、急に自覚したのだ。

「……タケ？」

「え？」

「……大丈夫？」

「あ……うん。何考えてたの？」

「……うん……いろいろ、かな？」

「……ふん」

「タケは？」

「……いろいろ、だな」

「……ふうん」

僕は目を逸らしたままだった。

しばらく当たり障りのない会話をしていたのだが、突然草薙が立ち上がった。

「……どうした？」

「出よ。お昼は別のところで食べたいし」

時計を見ると、一時近くだった。

九時からの映画だったのだから、二時間近くもここにいたらしい。

「……これ以上粘ると文句言われそうだな」

チラッとレジのほうを見ると、社員らしい店員のおじさんと目が合った。

彼のイライラが伝わってきて、僕は笑ってしまっ。

僕が立ち上がろうとすると、草薙が握りこぶしを差し出した。

「はい」

「？」

僕がどうしたら良いのかわからずにいると、彼女は手の中身をテーブルに置いた。

「お金」

「……さっさと」

「おじつてもらう理由がないから」

草薙は立ち上がり、先に出口に向かってしまった。

僕は仕方なくテーブルの上の小銭を拾い、レシートを掴んでその後を追いかけた。

会計を済まして外に出ると、草薙がガードレールに腰掛けてこっちを見ていた。

「……で、どうします？」

「私、なんでここにいるの？」

「へ？」

草薙は単語を区切って繰り返した。

「私、なんで、ここに、いるの？」

「……と、言われても……」

草薙はかなりきつい目でこっちを睨んでいた。

「……タケは何のつもりで私を誘ったの？」

「最期の思い出に」なんては言えない。

僕は言葉に詰まってしまった。

そんな僕を見て、草薙は視線を下に落とした。

「……私は……」

しかし、草薙は途中で言葉を止め、口を少し開けたまま停止した。

そして唇をきゅっと締めると、顔を上げた。

「やめた、こんな話」

その顔に笑顔が戻っていた。

彼女は立ち上がり、手で僕を促した。

「ちょっと歩い」

僕が立ち止まっていると、彼女は「一、二歩歩いてから三歩を振り向いた。」

「置いてっちやうよ!」

僕はしぶしぶ歩き始めた。

彼女に言いたいことがあるのは分かりきっていた。

多分、その内容も。

ただ僕が、どうしようもないほど臆病なだけだ。

どうしようもないほど。

僕はもう、痛い目を見たくなかったのだ。

僕達は公園のベンチに座っていた。

ただ、座っていた。

途中で買った、テイクアウトのハンバーガーにも手をつけず、ただ、座っていた。

ぼくはその時間が無性に懐かしかった。

(何故だろう……)

彼女と二人つきりになったことなど一度もなかったのに。

この公園だって始めてきた場所なのに。

こんな瞬間、夢の中でも、空想の中でも経験したことはなかった。

しかし、僕はすぐ理解した。

この気持ちだ。

そう僕は、満員電車で揉まれることも、誰かにおびえることも、生きる意味なんて考えることもなかった日々と、同じ気持ちを抱いていた。

それは幸せと呼ぶにはあまりに当たり前で、平凡と片付けるには、あまりに貴重だった。

なににせよ、僕が失ってしまったものだ。

「なんであんなにからまれたの？」

草薙が唐突に尋ねてきて、僕は一瞬思考が止まってしまっ

「私のイメージだと、タケはあーいうことされる奴じゃないんだけど……」

一瞬の沈黙。

滑り台のところにいる、園児たちの楽しそうな声が聞こえてきた。

「……時田はさ、いろんなことやってんだよ、万引きとか、放火とか、カツアゲとか」

他愛のない悪戯をするような気軽さで。

「……マジ？」

「マジマジ。しかも、目えつけた奴にも無理矢理やらせる」

「……タケも？」

僕は声を上げて笑った。

「……素直に従ってたら、こんな風になってないよ」

正義面した結果が、この日常だ。

あの日、僕はあいつを止めようと試みた。

確か、V系のバンドのCDを盗ろうとしていたのだ。

よせよ。欲しいなら買えばいい。金、あるんだろ？

……怖いのか？

……まあ

腰抜け。ごちゃごちゃ言ってねえでさっさと盗れよ。それにな、そもそも俺らはこのCDが欲しいわけじゃねえんだよ

はあ？　じゃあなんで……

スリルだよ

会話のその後はよく覚えていない。

ただ、どうなったにせよ、時田が新しい「遊び」を見つけたこと、僕がその標的とされたことに、変わりはない。

それを達成する力のない者の「正義」は、本人を傷つけるだけだ。

草薙は感慨深げだった。

「……じゃあ、万引きを止めようとしたのが……」

「間違いだった」

草薙は顔をしかめた。

「原因だったの？」って聞こうとしたの！」

「どっちにしろ一緒だろ。あの時言つとおりにしてれば、こんなことにはならなかった」

「……それじゃ、自分の身を守るためなら、何をしても良いってことになるけど？」

今度は僕が顔をしかめる。

そういうことなのだろうか。

少し、飛躍しすぎているように思えた。

「……かもな」

僕は結局、曖昧に肩をすくめた。

それで草薙が不服そうに睨んでくる。

僕はその知らぬ顔でハンバーガーを取り出し、包み紙を広げ、全く何も考えずにそれにかぶりついた。

「あ」

僕はほとんど嚙まずにそれを飲み込んだ。

「……なんだよ？」

「……それ、私のなんだけど」

「え？」

彼女の指摘で手の中のハンバーガーを見ると、確かに僕が注文したものではなかった。

僕は何度か瞬きした後、ちらりと彼女の方を見た。

「……返す？」

「……しょーがない。こっちでいいよ」

草薙はがさがさと袋を探り、もう一つのほうを取り出した。

「……いめん」

草薙は「気にしないで」という風に微笑む。

僕は　深い意図は全くなかったが　手にしたハンバーガーを彼女の顔の前に差し出した。

「……え？」

「一口」

彼女は目をぱちくりさせていたが、ふっと微笑み、ぱくつと一口食べた。

「美味しい。ありがとう」

「いやはや、ぜんぜん気付かなかった」

僕は言いながら、もう一口ハンバーガーをほおばった。

初めて食べる味だったが、なかなか美味しかった。

「……ほら」

横を見ると、草薙がハンバーガーを差し出していた。

僕は戸惑いながらも、それにかぶりついた。

「サンキュ」

「一口デカツ!!」

草薙は僕の食べたところを見て叫んだ。

「はあ??? これでも遠慮したんだけど」

「どじがー!」

そう言いながら、彼女はクスクス笑っていた。

僕は呆れながら、フライドポテトを口に放り込んだ。

僕は最後の一口を口に押し込むと、包み紙をぐしゃっと丸めた。

「ゴミ箱はあっち」

草薙が示した方を向くと、少し離れたところに、金属製のゴミ箱が置いてあった。

普通の、コップを大きくしたようなゴミ箱で、蓋は付いていなかった。

「……入るかな？」

僕がバスケットボールのシュートモーションを真似ると、草薙はニヤツと笑った。

「賭ける？」

僕はしばらくその悪戯っぽい笑顔を見つめていた。

というか、見とれていたのだが。

僕は無理に視線をはずし、手の中の紙くずを見つめた。

「……何を？」

「願い事を一つ」

「願い事？」

「そ。例えば「三回回ってワンと言え」とか「電車の中で大声で叫べ」とか。あ、拒否権はないよ」

「ただの嫌がらせじゃねえか!!」

草薙は声を上げて笑った。

「例えばだって、例えば」

「つまり、もう少し酷なことを考えてるわけだ」

「当たり前じゃない」

内容を聞いても、草薙は微笑むだけで何も教えてくれなかった。

「よし、分かった！」

僕は立ち上がった。

「覚悟は決まったの？」

「いっやー！」

僕はゴミ箱の距離に見当をつける。

「決めりゃいいんだ、決めりゃ」

「なにしてもらおうかなー？」

「シャラップ！」

そして僕は、思い切りよく、包み紙をぶん投げた。

紙のボールは、NBA選手のスリーポイントのようなきれいな弧を描き、ゴミ箱の口の真ん中を通った。

僕はその勢いそのまま拳を突き上げる。

「おっしゃー！！」

「あゝあ。入れちゃった」

「ザマアミロ」

僕は笑いながら言った。

「さあーで、何をしてもら……」

「さてー!」

と草薙は僕の言葉を遮ると、すっと立ち上がった。

「そろそろ行こう。次は何しようか?」

「え?」

「買い物でも行こうか。私、買いたいものが……」

「おい」

草薙はすつとぼけた。

「何?」

「……テメエ」

「アハハ！」

笑ってごまかそうとしてやがる。

僕は笑いを堪えながら横を向いた。

まあそれはそれで構わないのか。

僕はもう、「願い事」を叶えてもらったのだから。

ふと見ると、草薙も包み紙を丸め、ゴミ箱との距離を測っていた。

「やめとけやめとけ。どーせ入んないよ」

「シャアラップ！」

草薙が「えい！」と声を出して投げた紙くずが、ふわっと浮かび、風に曲げられ、縁に一度ぶつかってから、ぎりぎりでゴミ箱の中に落ちた。

「おやあ？」

「……なんだよ？」

「入ったよ？」

草薙は笑っていたが、僕は肩をすくめて先に歩き始めた。

「さっきのは、俺が投げた時の話。草薙が入れても意味はないよ」

「はあ！？ 卑怯！」

「なんとも言っておきな」

すると、思いっきり背中をどつかれた。

おかしかったが、結構痛かった。

女子の生態には理解できないものが多い。

中でもトップレベルなのは「ショッピング」という代物だ。

買ってもらえないのにいろんな店を見て回り、「これかわいい!...!」とか何とか言ってる……。

何が楽しいんだろう。

「そりゃ、それが楽しいんだよ」

草薙は笑って答えてくれたが、正直意味が分からない。

「……いや、だから何が?」

すると草薙は顔をしかめた。

うまい答えを探しているらしい。

「それは……。サッカーやってる人たちに、「一つのボールをけりあって、あの枠に放り込もうとして、何が楽しいんだ？」って聞いてるのと同じだよ」

「なるほど」と思った。

まあ、だからと言って、理解できるわけではないが。

「でもさ、サッカーも二時間もやってりゃ飽きるぜ？」

「サッカー、野球、バスケット具合にスポーツを変えてったら飽きないでしょ？洋服、アクセサリとか雑貨とか……」

僕が思わず溜息をつくとき、草薙は苦笑いを浮かべた。

「疲れた？」

「だいぶ。草薙は門限とかあるの？」

「学校サボつといて、門限も何もないでしょ」

草薙はそう言いながら、手に取っていた青いガラスのコップを棚に戻した。

「……………悪い」

僕がそう言うと、草薙はまた顔をしかめた。

「謝らないでよ」

「……………でも……………」

「私はそんなつもりで来たんじゃない」

草薙は吐き捨てるように言った。

その怒っている顔を見て、僕はふと疑問に思った。

「……じゃあ、どんなつもりで？」

「……」

「……睨むなよ」

「……男の子が女の子に、「一緒に出かけよう」と言いました。女の子は「いいよ」と答えました」

無機質な言い方だった。

「さて問題です。誘ったのは何故？ 断らなかったのは何故？」

「……その日に予定がなかったから」

「タケ？」

草薙は本気で怒っていた。

僕は興味もない、緑のガラスのコップを手に取り、まるで初めて

見るものであるかのように眺めた。

「見て。高いよな」

僕は彼女をちらりと伺い、溜息をついてコップを棚に戻した。

「……分かったよ」

正直に言えば、彼女にここまで言われているにも関わらず、僕はそれを口にしたくなかった。

だってそうじゃないか。

僕は知っている。

彼女も知っている。

わざわざ確認する必要なんてないだろう。

ただ、それと同時に、言わなければならないこと。

もう、これが最後であることにも、僕は気づいていた。

「……」「男の子」「は」、「女の子」「のことが好きなんだ」

僕は　腹をくくったつもりであったにも関わらず　彼女
の目を見ることもできなかった。

でも、続けた。

終いまで言えないことの方がもっと情けなく思えたのだ。

「……だから、誘った。優しい「女の子」は、きつと断らないだろ
うと踏んでね」

どう思っていようと、彼女は断らなかつただろう。

彼女はそういう娘だし、何より、そういう状況だった。

僕は卑怯な自分に初めて気が付いた。

そのことが猛烈に恥ずかしかった。

「……情けないよな。今だって、「女の子」の目を見れないんだから……」

しばらく、草薙は何も言わなかった。

「……」「女の子」は……」

沈黙を破ったのは、とても優しい声だった。

「それほど優しくないよ」

「え？」

驚いて顔を上げると、草薙は穏やかに微笑んでいた。

「女の子」は「男の子」のことが好きなんだよ？」

息が止まった。

草薙は微笑みながら続ける。

「ずっと前から」

思い上がっているようだが、僕はそれを知っていた。

それなのに、僕は自分で驚いてしまうほど嬉しかった。

生きていてよかった。

本気でそんな言葉が頭に浮かんだ。

僕は涙が出そうになるのをやっとこらえている。

喉が詰まって、言葉は出せない。

草薙は待っていてくれている。

僕は自分のとてつもない歓びを、たった五文字の言葉に込めた。

「……………」
「ありがとう」

草薙は嬉しそうに、やはり五文字の言葉で応える。

「……………」
「……………」

そう言った草薙の頬が、ほんのり赤くなっていた。

生きていてよかった。

ホントに。

何かを成し遂げられたわけではない。

何かを残せそうにもない。

それでも、僕の命は無駄ではなかった。

そう思えた。

時計を見ると、六時半を過ぎていた。

「……そろそろ帰ろうか」

「もう？」

草薙は時計を確認しながら言った。

「まだ六時半だよ？」

「……怒られない？」

「大丈夫。今日のこと、親に話してあるから」

「はあ??」

話を聞くと、彼女は両親に僕の状況を伝え、そのうえで今日出かける許可をもらったらしい。

「……なるほどねえ」

「ちゃんど軍資金ももらってるし、安心して！ タケ、何食べた
い？」

「……俺は何でも良いや。ってか、草薙……」

僕は目を細め、彼女をじっと見つめた。

「えっ？」

「軍資金」までもらって、俺にお知らせしようとしたのか？」

草薙は目を丸くして僕を見ている。

「意外なことを聞く」といわんばかりの顔だった。

「だって、そのほうが気分出るじゃん」

僕がその言葉に啞然としてしまっていると、草薙は屈託の無い笑顔で僕に向けてきた。

「ほら、気分って大事でしょ？」

僕は吹き出しそうになったのを何とかこらえ、横を向いて首を振ってみせる。

「……やれやれ」

「あ、あのお店、良々そうじゃない？」

草薙はイタリアンの店を指差していた。

おしゃれな佇まい、柔らかい照明、少し薄暗い店内、外に出されたメニューの値段。

「おいおい」と思った。

「……俺らがあそこ入ったら、場違いにも程があんだろ」

草薙は僕の上から下までじろじろ見た。

「……まあねえ」

「ハハのヤロオ……」

「あ、ゴメンゴメン」

「……謝る気ないでしょ」

「うん」

僕は呆れ笑いを浮かべて歩き始めた。

草薙はすぐ追いかけてきて、僕の横に並びながら首を傾げる。

「じゃあさ、どの店にすんの？」

「普通に……」

「普通に？」

「……ファミレスとか？」

草薙がっかりしたように肩を落とす。

「……さっきも行ったじゃん」

「だってさ」

僕は言い訳がましい口調になってしまう。

「ガキ二人で入って大丈夫な店ってそうそうないぜ？」

草薙の動きが止まる。

振り向くと彼女は視線を落とし、身じろぎもせず何かを真剣に考え込んでいた。

「……草薙？」

「……じゃあ、分かった」

草薙は携帯を取り出し、ものすごい速さで操作を始める。

「……どうしたの？」

「メール」

「黙ってついてくればいいの!」

んな無茶な。

そう思いつつ、僕は彼女の言うとおりにした。

温かくて柔らかい彼女の手を、僕は離したくなかったのだ。

「な、なんで!？」

僕は思わず大きな声を出してしまった。

草薙が向かっていたのは、彼女の家だった。

そいつは予想外だった。

草薙は肩をすくめた。

「変なファミレス入るより、お母さんの手料理のほうが良いと思っ
て」

「いや、そうかもしれないけど……」

「ほら、ちっちと歩くー」

草薙はぐいぐい引っ張ってくる。

「うわっ！ ちょ、草薙！」

またバランスを崩しそうになりながら、僕は笑いが込み上げてくるのを感じていた。

草薙も緊張しているらしい。

まあ、考えて見ればそれも不思議ではないような……。

「タケ、何笑ってるわけ？」

「別にいい？」

「あっやしー顔！」

と、その時、草薙の携帯が鳴り、僕らを立ち止まらせる。

メールを見た草薙が、大きな声を出した。

「……ええ!？」

「……どした？」

「外食してるんだって！」

草薙は「不良中年ども」と、ぶつぶつ呟いた。

ただ僕は、彼女の両親に会わなくてすむかもしれないと、内心ホツとしていた。

別にやましいこともないが、やっぱり顔を合わせたら気まずいだろう。

「じゃあどうすんの?」

僕が聞くと、草薙は笑って片目をつむった。

「大丈夫。私を作るから」

「……大丈夫なの？ それ」

僕の軽口に草薙が笑顔のまま左手を上げ　　つまり、僕の右手
を持ち上げ、無防備の脇腹に突きをぶち込んだ。

「イテッ！」

「さ、早く行こ」

またぐいっと引っ張られる。

僕はクスクス笑いながら、それについて行く。

道の向こうに、昼と夜の境目の、群青色の空が広がっていた。

その空の色が、ぽつんと光っている一番星が、街灯の明かりが、
車のヘッドライトが、その全てが、輝いて見えた。

そういうわけで僕は、草薙の家（かなり高いマンションの十六階にある）の居間で椅子に座り、彼女が台所で忙しそうに動いているのを見ていた。

（最初は手伝おうとしていたのだが、草薙に「足手まとい」と切り捨てられ、おとなしく待つことになったのだ）

美味しそうな音と匂いが漂ってくる。

急にお腹が減ってきて、僕は台所にいる草薙に呼びかけた。

「草薙い。まだあ？」

「んー、もうちよい」

「へーい」

僕は椅子の背もたれに向かい合うような形で座り、ほっと息を付いた。

(……疲れた)

当然といえば当然かも知れない。

でも、それは苦痛ではなかった。

多分、こういう疲れ方なら、朝に目覚めたとき、前日の疲れが体の節々に残っている、なんてことにはならないのだろう。

身体とまぶたはともかく、心が軽かった。

「お待たせ！」

草薙が大きなトレーを抱えて居間に入ってきた。

「おお！」

「あんまり品数はないけどね」

と、草薙は照れくさそうに笑い、食器を並べ始めた。

「ご飯と味噌汁と、それから豚肉ともやし炒め物……だけでごめん」

「い、いやいや」

予想をはるかに上回る出来で、僕は心底驚かされていた。

「草薙、すげえな！」

草薙の手がぴたっと止まった。

そして、かなり不機嫌な顔が僕の方を向く。

「え」

僕はその理由が分からず、ただ目を瞬かせるしか出来なかった。

「ど、どうしたの？ てか、何？」

草薙は僕から顔を背けると、また食器を並べ始めた。

彼女は作業をすべて終えてから、ポツリと言った。

「……別に。ほら、食べよ？」

僕は首を傾げてしまったが、どうすればいいのかも分からないので、おとなしく目の前の食事にありつくことにした。

「……いただきます」

「どーぞ」

その声にも彼女の不機嫌さが現れていて、僕は思わず笑ってしま
う。

途端に草薙の視線が飛んで来た。

「何？」

「いえ、なんでも」

僕は味噌汁のお椀を掴み、ずずっとすすりこんだ。

「お、うまい！」

「ありがとう」

草薙はニコツと笑うと、自分も味噌汁に口をつけ、頷いた。

「うん、我ながらいい出来」

「アハハ！」

「何？ なにか文句でも？」

「いえいえ、まさか！」

僕は一旦箸を置き、テーブルに両手をつけて頭を下げた。

「大変美味しゅうございます。本当にありがとうございます、草薙様」

せつかくおどけてみせたのに、反応がなかった。

僕は「あれ？」と思い、目だけ上げて彼女を窺う。

草薙「様」は表情を完璧に殺した顔で、黙々と箸を動かしていた。

僕は下手なことをやって、彼女を更に怒らせるようなことをし
てしまったので、何も言わずに再び箸を取った。

草薙が何に怒っているのか、正直、さっぱり分からない。

なにかまずいことを言った覚えもないし、やった覚えもない。

僕は悪くない。

……はずだ。

僕は自分にそう言い聞かせ、ご飯をかつこんだ。

残ったご飯粒も全部さらい、ふっと息をついて茶碗をテーブルに戻そうとした瞬間、こっちに向けて手を伸ばしている草薙に気づいた。

「え」

「おかわり持ってこようか？」

「え、あ、うん。お願い……します」

とっさに出た最後の言葉で、草薙にまた顔をしかめられてしまう。

「……何それ？」

「いや、なんか怒ってるみたいだし……」

「怒ってないよ」

嘘だ。

僕の頭の中をよぎった眩きに応えるように、草薙が続ける。

「……ただ、ちょっとイラッとしただけ」

「え」

草薙は立ち上がり、僕の茶碗を持って台所の方へ行ってしまった。

さっぱり分からない。

一体何に？

というか、はっきり言って「イラッとした」なんてレベルじゃなかったような気が……。

やばい？ やばいのか？

草薙が戻ってきた。

相変わらず怒っているらしい。

「はい。普通に盛ってよかったんだよね？」

「うん。ありがとう」

僕に茶碗を渡してすぐ、草薙が「そういえば」と切り出した。

「さっきの賭け、お願いを思いついたよ？」

「賭け？」

「ゴミ箱の」

「ああ」

僕は頬をポリポリかいた。

「俺が勝ったはずなんだけど」

というだけのことを、僕は言えなかったのだ。

「……はい。出来ることなら何でも致します」

草薙は「フフン」と笑った。

「言ったね？」

僕はその笑顔に危険なものを感じる。

「あの、お手柔らかに……」

彼女は笑い声を上げた。

「アハハ！ そんな無茶を言うはずないでしょ？」

僕は肩をすくめた。

「言わないって！ ただね……」

草薙が言葉を切り、ほんの一瞬不安そうな目を僕に向けた。

ただ、それは本当に一瞬で、僕がなにか言う前に彼女は言葉を続けた。

「今まで全然気にしてなかったことが、さっき急に嫌になっちゃったんだ」

何をやった？

僕はじわっと汗が滲み出てくるのを感じた。

根拠も何も無いが、嫌な予感がしたのだ。

「それで、「お願い」なんだけど……」

彼女の笑顔が怖い。

そう思うのがただの邪推であって欲しいと、僕は半ば祈るような気持ちでいた。

「私のこと、名前で呼んで？」

「へ？」

僕は目を瞬かせた。

「名前？」

「そ。実は私、名字で呼ばれるのあんまり好きじゃ……。どうしたの？」

僕は完全に気が抜けてしまい、テーブルにうつ伏せにへたれこんでしまっていた。

「い、いや、何がそんなに気に食わなかったのかと思ってたら、そんなくだらないことで……。」

「くだらなくないって!」

顔を上げてみて、草薙が少し顔を赤らめているのが分かった。

とはいえ、僕の中に生まれた若干のもやもやは晴れなかった。

いや、まあ、隠しても仕方がないので、正直に言えば、多少、ほんの少し、ちよつとだけ、わずかに、かなり、ドキツとしただけだ。

ホントに。

僕はまた顔を伏せた。

「アーソーデスネー」

「何その反応？」

「意味はない」

とじじじとじじしておく。

しばらくそのままだった後顔を上げると、草薙は僕を見つめたまま、じっと待っていた。

僕は一瞬息がつまるのを感じた。

「……その待ち方は卑怯だよ」

「え？」

抵抗出来ない上に、緊張が煽られる。

ただ名前を呼ぶだけのことが、とてつもない難題に思えた。

それでも、僕は彼女を落胆させたくなかった。

「……分かった。次からはそうする」

「次い？」

草薙は不服らしい。

まあそりゃそうか。

僕はみっともない言い訳を始める。

「……何の脈絡もなしに名前呼ぶとか……変じゃん」

しかし実際のところ、問題はそんなことではなかった。

まだ決心が出来ていなかった。

それは僕の中では、境界線を一步またぐような行為だった。

多分、普通の奴なら、知らぬ間に通り過ぎてしまっような些細なことなのだろうが、僕にとっては特別だったのだ。

「……タケ？」

見ると、草薙が口元に微笑みを浮かべながら、首を傾げ、こっちを覗き込んでいた。

僕は勝ち目がないことを知りつつ、ささやかな抵抗を続ける。

「……何？」

「違うでしょ」

草薙はニコツと笑った。

「そこは「優」どうしたの？」「って聞き返すところだよ？」

まいった。

勝てる気がしない。

それをこの時思い知らされた僕は、頬をぼりぼり搔きながら、顔を背けた。

「だからやり直し。タケ？」

草薙は随分と楽しげだった。

釣られて僕も顔がにやけてしまう。

照れてる場合じゃなかった。

「……優？」

弱々しい、自信のカケラもない声だった。

僕は名前を呼ぶことより、そんな声を出すことの方がよほど恥ずかしいということに遅れて気づいた。

とはいえ直後、草な……いや、優、の笑顔がさらに明るさを増した。

僕はまた息を詰まらせ、身体の動かし方も忘れて彼女に視線を吸い付けられる。

「よく出来ました！」

僕が照れ、呆れ、苦笑いをごちゃまぜにした顔をすると、優はキラキラ輝く夏の水しぶきみたいな笑い声を上げた。

それから僕たちは食事を終えると、二人で片付けをして、他愛のない話　ごく最近読んだ本のことやら、耳にした面白いことやらを話した。

願えば願うほど、想いに逆行して時間は飛び去っていく。

僕は生きたいと思った。

生きたい。

まだ死にたくない。

僕はぼそりと呟いた。

「……」「時よ、とどまれ。汝は美しい」……「

突然に思い出した台詞だった。

正に、その言葉通りだったのだ。

「え？」

「……なんでもない」

そういえば、その言葉はファウストの最後の言葉だったか。

彼は最後に救われることになっているらしいけど、僕はどうだろう。

時計を見ると、8時半過ぎだった。

潮時だな、と思った。

僕は優の方に向き直った。

「今日はホントにありがとう。楽しかったよ」

優は帰ろうとしている僕の雰囲気気づいて驚いたようだが、すぐにニッコリ微笑んだ。

「いちからこそ」

そして彼女は時計を見上げ、もう一度目を丸くした。

「もうこんな時間なんだ！ あっという間だったね？」

「……うん」

僕がつばを飲み込むと、喉がゴクリと大きな音を立てた。

慌ててその辺りを手で抑えた僕を見て、優が不思議そうに首を傾げる。

「……どうしたの？」

僕は驚いた。

あんなに大きな音だったのに、彼女には聞こえていないのだ。

「……なんでも、ない」

嘘をついてばかりだ。

特に今日は。

一番大事なところをかすめはしたけど、一番深い場所は隠し通してしまった。

仕方ないと言えば仕方ないのかもしれない。

「俺、今日死ぬんだ」なんて言ったところで、彼女を困らせるだけなんだから。

そして、「もっと生きたい」「なんて泣きついたところで、彼女に出来ることなんて、多分何も無い。

「……だいぶ遅くなっちゃったね。帰るよ」

「……うん。大丈夫？」

「多分」

僕は「よいしょ」と立ち上がった。

このタイミングを逃すと、僕はここから離れられない。

そんな気がした。

「タケ、明日は暇？」

唐突な問い掛けに僕は一瞬言葉が出ない。

優は言い訳するような調子で続けた。

「いや、あのね？ まだもらった「軍資金」も残ってるし、今日はほんとに楽しかったし、明日も休みだし……」

「予定もないし？」

僕が笑って口を挟むと、優もまた笑顔になった。

そう、僕の予定は真っ白だ。

僕がここに存在しているのかどうかも含め、完全なる白紙だ。

そこに好きな子と一緒にどこかに出かける、そんな楽しい予定が入っていたら、僕の命がつながるかもしれない。

僕はそんなくたらないジnkスのような可能性にさえ、さすがうとしていた。

「そーいえばさ?」

僕は玄関の方に歩き出しながら言った。

「軍資金」、そんなにもらってたわけ? さっきお金見せあった時には……」

「うん。ごめんね。隠してたんだ」

見ると、優はかなり申し訳なさそうな顔をしていた。

僕は別に怒る気はなかったが、その理由が知りたかったので首を傾げた。

「あのね」

優は少し急いで口を開いた。

「何となくなんだけど、今日はちゃんと二人で出かけたかったの」

優は一生懸命な目で続ける。

「二人に出来ることをやるっていうか、背伸びしないで、身の丈に合った一日を過ごしたかったっていうか……言ってること分かる?」

「分かるよ」

と僕は相槌を打った。

少なくとも、その雰囲気だけは掴めたような気がした。

彼女は借金をして遊び回るような、自棄になっているようなやり方を望まなかったのだ。

「……でも」

僕は言った。

「気が変わったんだ？」

「……うん」

彼女はいわゆる「軍資金」を使おうとしていた。それも徹底的に。

「……なんでかは分からないけど、この時を逃しちゃいけない気がして……」

僕は驚いた。

これが最後だと、優は無意識の内に悟ってしまったらしい。

とはいえまだ確信には至っていない。

僕は一度隠すと決めた以上、隠し通さなくてはならなかった。

負けたくはなかったのだ。

「……明日だってあるじゃん」

僕の嘘に、優は微笑んだ。

「そうだよね？ その次も、その次も、そのまた次だってあるの
ね？」

僕は心臓がドキリと鼓動するのを感じた。

そして、じわりと冷たい痛み。

自分の目に衝撃が走るのを感じた僕は、無理に視線を落とし、全
神経を集中させて唇を微笑みの形にした。

「……そうだね」

玄関に着いた僕は足を靴に押し込んだ。

優はほとんど何も疑わずに、問い掛けてきた。

「どつする？ 時間も場所も同じにしとく？」

「だね」

言葉がそれしか出てこない。

僕は目を逸らしたままだった。

とはいえ、彼女の顔を見ないままで終わらせたくはなかったし、僕は心を決めなくてはならなかった。

「……今日は……」

まだ見れない。

「ホントのホントにありがとう」

声は震えていない。

よし、よくやった。

そうして僕は初めて、顔を上げ、優の顔を直視した。

(……………えっ……………?)

僕は驚いてしまった。

「こちらこそ。ホントのホントに楽しかったよ」

明るい言い方が、声が、心配そうなその目を際立たせていた。

僕は心がうずくのを感じた。

「アハハ！」

自分の声が非常に奇妙に聞こえたし、突然の笑い声に優がぎよつとしたのも分かっていたが、僕にはそんなことを気にする余裕はなかった。

「どうしたの？ 俺の顔になんかついてる？」

「……ううん」

彼女はまだ心配そうだった。

当たり前かもしれない。

しかし、僕はごまかすやり方を決めていた。

突然姿勢をただし、大仰なお辞儀を試みせたのだ。

「では、長らくお邪魔いたしました！ これにて失礼させていただきます！」

狙い通りだった。

僕のわざとらしい仕草に、優はクスリと笑ったのだ。

よし、いねばいい。

僕はクルリと向きを変え、ドアノブを掴んだ。

ドアを開ける。

隙間を通り抜ける。

そしてその空間を再び閉めながら、優に笑いかける。

「じゃ、明日」

「うん」

笑顔の優のいる空間が細くなる。

優の輪郭が細くなる。

細くなる。

もっと細くなる。

消えた。

消えてしまった。

僕はすぐに向きを変え、エレベーターホールに向かって歩き始める。

笑顔はドアを閉めた瞬間に消えてしまった。

「暗い顔だなあ？」

僕は真横のネモをじろりと見た。

「なんなんだよ。さっきまで声もかけてこなかったのに」

「なあに言ってるんだか。気い使ってやったんだろ？」

余計なお世話だ、と思ったが、口には出さないでおいた。

「……で？ こっちの「お楽しみ」が終わったから出てきたわけだ？」

「……随分と毒のある言い方するな？」

ネモは軽くあしらうような言い方をする。

「言つとくが、俺が伝えたからって俺のせいってわけじゃないぜ？」

「「伝えた」？「運んだ」じゃなくて？」

「あのなあ」

ネモが呆れたように笑う。

「俺、別に死神ってわけじゃないんだぜ？」

「あ」

エレベーターがちょうど通りすぎてしまった。

運が悪い。

いや、そんなことはともかく。

「え、死神じゃないの？」

「違つよ」

ネモは一步前に出て下の矢印を押した。

「俺は執行するわけでも、決定するわけでもない。ただ、伝えるだけだ。それに……」

「それに？」

ネモがちらっと目を上げて僕を見た。

「……望んでるわけでもない」

「え」

僕は本気で驚いてしまった。

ネモは本気で申し訳なさそうに視線を落としていたのだ。

何故かは分からないが僕は、彼が僕のことを惜しんでくれるとは微塵も思っていなかった。

「無駄な人生だったな」

なんていう皮肉交じりのユーモアで呆気無く送り出されると思っていたのだ。

その方が余程彼らしいし、僕だって気が楽だ。

「……よせよ。もう決まったことなんだろう？ 別にネモのせいだなんて思っていないし、そういう変えようがないことで、そんな顔するなよ」

ネモがこちらを振り向き、僕を見た。

そのままの顔、そのままの目で。

僕はその苦悩と葛藤を感じ取り、再度驚かされる。

ネモがそんな人間らしい素振りを見せるとは！

それにしても、ネモは一体何者なんだろう？

「死神」ではないらしい。

でも、明らかに「ヒト」でもない。

幽霊にしては存在感がありすぎるし、天使だのなんだの、そういう類の奴にしては口も態度も悪い。

(……そうか)

僕は思った。

ネモは「ネモ」なのだ。

つまりは「誰でもない」。

案外、すべてが僕の夢かもしれない、と思った。

走馬灯の代わりに僕の脳裏に描かれた、長い幻だ。

(……走馬灯?)

自分の思考に笑いそうになってしまった。

結局僕は、自分の最期を疑おうとしていないのだ。

(……だってそうじゃないか)

僕は心の中で呟いた。

(こんな、夢みたいな一日でケリを付けられたら、それ以上はない……)

本心だった。

無理はしていない。
嘘もない。

僕はうつむくネモの姿を見つめながら、そんなことを考えていた。

光が目の隅を横切る。

僕とネモが同時に顔を上げ、到着したエレベーターの方を見た。

その時。

「タケ!!!」

優の声が突如として響き渡った。

そして僕がそれに何かを感じるより早く

「 ヤバい! ! 」

振り向くと、ネモが驚愕をそのまま形にしたような顔で、呆然と僕を見つめ返していた。

57 (前書き)

とんでもなく遅くなってしまい、申し訳なく思っております。

理由はまあPCの不調から私自身のやる気、時間のなさとか色々上げることは出来るんですが、一番はこの部分を丸つきり書き直し、力を注ぎ込んだからだと言えます。

どうしても一話にまとめたかったので少し長くなってしまいましたたが、どうぞお楽しみになってください。

更新が途切れ途切れになりそうな気もしますが、もうすぐ完結です。皆様に最後までお付き合いいただけると祈っております。

田中 遼

ネモはいつものようにするりと姿を消した。

僕はもう慣れてしまい、「またか」と思ったただけだ。

とはいえ、その最後の言葉になにか不穏なものを感じたのは否めない。

まさか、優に被害が及ぶような何かが起こるわけじゃないだろうな、という疑いを抱いたのだ。

(……いや、それはないだろ)

別に根拠があったわけではないが、それはありえないと思った。

だってそうじゃないか。

知らせる奴の生死も握ってない奴が、他の人間の生死をどうこうできるはずがない。

優は大丈夫だ。

大丈夫だ。

だからそんなことより。

「……どうしたの？」

「……今、そこに誰かいなかった？」

「え？」

優の目が正確にネモがいた場所を見つめていて、僕は驚かされた。

彼女にネモが見えるとは思っていなかった。

やはりネモは幻ではなかったらしい。

でも僕は、知らないふりをすることにした。

「誰が？」

説明するのは面倒だ。

優は不審そうな顔でまだその空間を見つめていた。

僕はちよつと微笑んで見せ、首をかしげた。

「ゆーさん？」

「……あ、ごめん」

と言いつつ、彼女の目はまだこっちを向かなかった。

僕が笑いながらため息をつくとき、彼女は僕の方をちらりと見た。

「……あのね、タケの「お願い」をまだ聞いてなかったなあと思っ
て」

「え？」

僕は驚いた。

まさかそんな用向きでわざわざ出てきたとは思っていなかったか
らだ。

「……なんか今日じゃなきゃいけない気がしたの」

それがぱつと頭にひらめいて出てきたのだろう。

そのひらめきが過ぎ去り、ふと正気に帰って今、自分の行動の唐突さに気がついたのかもしれない。

優はちょっとそっぽを向いて、頬をポリポリ掻いている。

照れているらしい。

僕は笑ってしまいそうになった。

今までに増して、彼女が愛おしかった。

胸の奥がほわりと温かくなった。

そして同時に、針が突き刺さっているような冷たい感触があった。

僕は優が好きだ。

優も多分、僕を好いていてくれているらしい。

でも、僕は、彼女を幸せにはできない。

僕は死ぬ。

気付くと、僕は優の手をとっていた。

僕の手は彼女が（そしてそれ以上に僕自身が）驚くのもかまわず、彼女を引き寄せ、抱きしめていた。

「タ、タケ……！？」

「え、あ、その……」

真っ白である。

正直、意味が分からない。

そのくせ、手は彼女を離そうとせず、ぴたりと固まっていた。

優もそれ以上何も言わず、ただ身を強張らせていた。

非常に居心地の悪い数秒間が過ぎていく。

「……優さん」

声がかすれた。

「……優さんのこの先の長い人生の中の十秒、……十秒だけ俺にく
ださい」

必死だった。

ただ、必死だった。

だから彼女の答えを待つ間、僕はほとんど命を懸けてその場所に
踏みとどまっていた。

体が逃げようとしてたのだ。

その時、張り詰めた僕をそっと包むような優しい声があった。

「十秒？」

優がクスリと笑った気配があった。

そういえば、彼女の体の緊張が、いつの間にかなくなっている。

「今から？」

優が拒まなかった、というだけでも、僕は嬉しかった。

僕はこみ上げてきたものをぐっとこらえ、微笑みを浮かべようと頑張った。

「……うん。数えて」

僕にそのカウントは不可能だった。

とても無理だ。

「……分かった。ちょっと待って」

優はもがき、一瞬だけ僕の手から自由になると、すぐに自分の腕を僕の背中に回した。

ぎゅっと力が入る。

優は小さな声で言った。

「行くよ?」

僕がうなずくと、彼女はゆっくり間を取ってから数え始めた。

僕は目を閉じた。

「いち」

熱い。

生きている温度だ。

「こーい」

それにすごく柔らかい。

なんだか分からない良い匂いもする。

「さーん」

優の力強い、確かな鼓動を感じる。

手に力をこめると、彼女もそれに答えてくれる。

僕は幸せだ。

「よーん」

でも、と心配になる。

本当に彼女は気を悪くしてないのだろうか。

嫌がる気持ちを隠してはいないのだろうか。

「うーお」

もしそうなら嫌だな、と思った。

僕は最後の最後まで彼女に迷惑をかけてしまった。

僕は優に助けられてばかりだ。

最初から、最後まで。

「ろーく」

もうだめだ。

もう遅い。

僕は彼女に何も出来ない。

何も返せない。

そのことに今気がつくなんて。

僕にいったい何が出来るといふのだ。

遅すぎる。

「なーな」

何故僕は死んでしまつんだ。

何故僕は優を幸せに出来ないんだ。

どうしてだ。

僕が悪いのか？

何をしたつて言つんだ。

これは人生を無駄にした報いなのか？

そんなの僕だけじゃないじゃないか。

何が悪いんだ？

誰のせいだ？

誰を責めれば良い？

いや、結局僕か？

僕なのか？

僕が僕の命を無駄にした。

それだけのことなのか？

「はーち」

ああ、もう時間がない。

よせ、やめてくれ。

まだだ。

僕はまだここにいたい。

こうやって優のそばにいたい。

優を抱きしめていたい。

い。
この体温と、感触と、香りと、空気と、彼女の優しさの中にいた

い。

ネモ、何でもっと早く来てくれなかったんだ。

せめてあと一日。

あと一日だけでも。

畜生、何で僕はもっと早く立ち上がらなかったんだ。

なんで、すべてを諦めていたんだ。

手を伸ばせばここに触れていたのに。

ここに、届いていたのに。

「……きゅーっ」

時よとどまれ。

時よとどまれ！

僕は生きたい。

生きていたい。

止まれ、止まってくれ。

ああ、終わってしまつ。

僕はどんな顔で彼女と別れれば良いんだ。

目が開けられない。

どうすれば。

歯を食いしばれ。

笑え。

一点の曇りも残さず笑え。

出来るか？

やるんだ。

でも、もし出来るなら……

頼む、誰か。

時を、止めてくれ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3186m/>

生きてはいた。

2011年12月10日04時50分発行